

平成 16 年度 卒業論文

高齢者の孤独感解消におけるペット飼育の効果

山形大学教育学部

人間環境教育課程情報教育コース

伊部 薫

目次

第1章 序論	1
1.1. はじめに	1
1.2. 日本の高齢社会の全体像.....	1
第2章 先行研究の整理.....	3
2.1. 孤独の定義と考える解決手段.....	3
2.2. 孤独を癒す手段・その1 ～高齢者同士のふれあい～	12
2.3. 孤独を癒す手段・その2 ～子どもとのふれあい～	14
2.4. 孤独を癒す手段・その3 ～地域でのふれあい～	17
2.5. 高齢者とペット飼育 ——動物の場合——	19
2.6. 高齢者とペット飼育 ——ペット型ロボットのの場合——	25
2.7. 高齢者とペット飼育 ——動物型玩具の場合——	28
第3章 調査研究の結果.....	30
3.1. 研究方法	30
3.2. 質問項目	30
3.3. 回答データ	35
第4章 分析結果	37
4.1. ペット飼育による間接的効果.....	37
4.2. その間接的効果から導き出される結果(1).....	37
4.3. その間接的効果から導き出される結果(2).....	40
第5章 結論	47
文献	48

第1章 序論

1.1. はじめに

高齢者問題は年金・介護などの社会保障制度の問題などを初めとして多岐にわたっている。この論文では今挙げた社会保障制度の問題よりも身近なことで、それよりも解決する可能性の高いかもしれない「高齢者の孤独感解消のためにはどうすればよいか」という、いわゆる“高齢者の心の問題”をとりあげたい。

1.2. 日本の高齢社会の全体像

まず、これから先行研究を整理して提示する前に、基礎データとして日本の高齢社会の全体像をさらっておきたい。

本題について語る前に日本の高齢社会の全体像を把握しなければならない。よって、まず統計本から入ることとする。「高齢社会白書 2003 年度版」よりとりあげた。

この本の中でふれあいと関わり深いものとして、特に「高齢者と家族」「高齢者と社会・地域」をとりあげてみた。

まず前者だが、高齢者の数は増えているにも関わらず、高齢者だけで暮らす世帯が増え、子や孫とふれあう機会が少なく、かつ高齢者の方も子や孫とのふれあいに消極的になっている。このことから、結論として、最近の日本の高齢者は離れて暮らす家族とのふれあいを欠いているのがわかる。ただ、三世代で暮らしているところでは、高齢者はそれなりに重要な役割を担っている。

そして後者は、高齢者は近所の人たちと概ね交流を持ち、親しい友人のいる人が多く、特に同姓の友人が多い。友人のいない者の割合は女性より男性の方が高め。そして高齢者の過半数がグループ活動に参加し、4人に1人がまちづくりへの参加意向を有していることから、高齢者は地域社会との繋がりのあることがわかった（内閣府 2003）。

次に、高齢者問題について市民はどう考えているかも重要なことである。大羽 素は論文の中で「高齢者とのふれあいについての市民の考え」を述べている（大羽 1992）。それをまとめると、

- 高齢者との親しい関係を約半数の市民は歓迎する態度にある（が、否定的な態度をとる人も少し増えている）。

第1章 序論

- 老親との暮らし方としては別居志向が進行し、ほぼ半分に達している（そしてそれに関わって同居の意思は減少した）。
- （二十歳以上の成人の考える）老後の面倒は「施設入所」に大きく依存する構えになっているのは変わらない（ただ、「家庭奉仕員」「昼間だけ施設で世話してもらう」がやや増加し、少し活動志向が増したとは言える）。
- （同上）将来の見通しは、依然として同じように悲観的な面があり、継続してそのような気分が続いている。

このことから、高齢者との関係においては親しい関係を希望する向きもあるが、それに実態（同居する等）が伴っておらず、それに関係してか将来高齢者になるであろう市民は自分の将来（つまり自分が高齢者になったとき）のことにあまり希望を持ってないということがわかる。

第2章 先行研究の整理

2.1. 孤独の定義と考える解決手段

まず，“孤独”とは何かを定義づけたい。

葉山桂子は，“孤独”“孤独感”の定義づけと，調査研究の結果として孤独感の解決法を提示している。

まず，葉山は，総務庁長官官房老人対策室の行った『老人の生活と意識に関する国際比較調査』を引用し，

日本の高齢者は調査対象5か国中最も「幸福感」が高い。しかし一方で「不安」も大きい。「経済面」では不安を感じている者の合計は59.1%に上る。また「健康面」では87.1%，「孤独（独りぼっちで頼りになる者がいないこと）」では63.1%が不安を感じていた。健康と孤独については5か国中，最高値を示していた。筆者が平成元年6月から半年間ホームヘルパーとして高齢者の日常生活について調査を行ったとき，高齢者の生活において特に問題と思われたのは「孤独」であった。家族に囲まれ一見何の不自由のない生活を送りながらも「生きていても仕方がない」「寂しいので早く死にたい」と訴える高齢者が少なくなかったのである。

とまとめている。

そして，孤独の定義として，『『孤独』は一人で寂しいという感情を伴う『状態』を表』（葉山 1994: 264）すとし，孤独感を「孤独感とは社会的関係の欠如によって生ずる不快で主観的な感情の体験である」（葉山 1994: 266）と定義した。

氏の行った調査研究の結果として，孤独感を全く感じていないケースに共通して見られるのは「自分の身のまわりのことは自分でできる程度の健康，困らない程度のお金，そして何らかの生きがい」だという。特に「孤独感から解放されるためには、『生きがい』によって現在の自己の有用感を見出すことが一つの重要なポイント」であると指摘している。

結果的に，高齢者を取り巻く社会的関係の中で孤独感が特に問題となるのは，家族関係において役割を持たない高齢者，家族関係において不満を持つ高齢者，親しい友人や仲間のない高齢者だった。

高齢期を生き生きと過ごすことのできる人の特徴は，

第2章 先行研究の整理

- 仲間のいる人
- 役割を持っている人
- 新しいことに積極的な意欲を燃やし続けている人

だという。

以下、まとめると、高齢者の孤独感解決のためには自立した社会的関係を発展させることが有効だということで、具体的な援助としては、①社会的関係における何らかの役割を持ってもらうこと、②社会的接触頻度や時間、機会を増やすこと、③楽しみや趣味活動を手助けすること、が有効だということである。

社会的関係における役割や、楽しみ・趣味活動をはじめとする社会的活動によって孤独感が克服される可能性は大きいということだった（葉山 1994）。

次に青木邦男は在宅高齢者の孤独感と関連する要因を探索的に明らかにしている。

それによると、先行研究を吟味した結果、高齢者の孤独感が他の年齢群に比較して必ずしも強いとはいえないということだった。

具体的には先行研究結果ならびに本調査結果に依拠すれば、高齢者は他の年齢集団に比較して特に孤独感が強いわけではないということである。

その調査結果は性差については調査結果に不一致だったが、孤独感に有意に関連する要因は男女共にほぼ同じ。SDS（抑うつ状態）では抑うつ状態が高いほど、生活満足度では満足度が低いほど、対人・自立的対処では自立的対処が高いほど、そして家族・親戚ソーシャル・サポートと友人・ソーシャル・サポートではサポートが低いほど、孤独感が高いということだった。

SDS は高いほど孤独感が高かった。この高齢者の抑うつ状態は高齢者の心の健康状態を脅かす重要な気分障害である。

逆に生活満足度が高いほど孤独感が低かった。これは、生活満足度が高いことは高齢者が自らの人生や生活に抱いている主観的な幸福感や充実感が高いことを意味している。

他には対人・自立的対処が高いほど孤独感が高かった。

性別では、男性では家族・親戚ソーシャル・サポートの多さ（男性は退職前の会社とその友人・同僚関係中心の生活から退職後には家族・親戚を中核とした関係に生活様式・意識を変更せざるをえず、そのために家族・親戚ソーシャル・サポートの相対的な重要性が増し、孤独感に影響を与えるため）が、女性では家族・親戚ソーシャル・サポートと友人ソーシャル・サポートの多さが孤独感を低くしていた。

まとめると、在宅高齢者の孤独感に対して有意に関連した要因は、男性では SDS、生活満足度、対人・自立的対処そして家族・親戚ソーシャル・サポートの 4 要因であり、女性では SDS、生活満足度、対人・自立的対処、家族・親戚ソーシャル・サポートの 5 要因である。

孤独感の緩和のためには豊かな人間関係の構築が必要。具体的には新しい人間関係を開拓すること。そのためには高齢者が徒歩で通える距離にあり、個性が認められるとともに

自己開示が安心してできる活動や雰囲気を持ち、高齢者が自らマネジメントする活動や場が必要であるということだった（青木 2001）。

宇都宮博は、共感性と個別性のうちどちらが高齢期の孤独感で優勢かを調べ、孤独感の様態を考察している。というのも、これは配偶者との関係性を発達の視座からとらえる必要性を考えたからだ。

以下に調査結果の考察をあげる。

まず、孤独感の2次元（共感性と個別性）は、高齢者にとって相容れられないものと考えられた。そして、共感性が高齢期の心理的適応と密接な関係にあり、高齢者の孤独感においては、個別性よりも共感性の方が重要な意味を有している。

次に、関係性発達の力動的側面を視野に入れた枠組みである関係性ステイタスの人数分布を検討すると、男女に共通して関係性達成方と表面的関係性型の占める割合が高かったが、男性がこの2つのステイタスに集中していたのに対し、女性は他のステイタスにもかなり分布していた。これより、女性は男性に比べて個人差が大きいことが示唆された。

各ステイタスの発達経路をみると、表面的関係性型は個別性の問題をあいまいなままにし、無自覚なままに今日まで至っていることが考えられる。それに対し、関係性達成型は個別性を自覚し、別個の存在だからこそ理解し合えるようにあり続けたいとする姿勢が、得点の低さに表れた。

モラルに関しては、関係性達成型と表面的関係性型が有意に高得点であった。なお少数ステイタスは、結婚生活の満足感とともにモラルにおいても、他のステイタスに比べて著しく低かったことから、不適応性が懸念される。

そして、孤独感のうち、高齢期の心理的適応にとって重要なのは共感性だけだった。概して共感性の高い関係性達成型は、高いレベルで結びついているケースが多い。

対照的に、表面的関係性型の個別性は、低いレベルで配偶者と結びついているケースが多かった。

以上より、高齢期の孤独感において重要な意味を有する共感性とモラルを、カップルレベルで高く持続させるには、配偶者の存在を絶えず人格レベルから価値づけながら、積極的に関与しつづける姿勢が大切であることが検証された。

結論として、高齢者のモラルにとって、孤独感は個別性の次元よりも、共感性の次元のほうが重要な要因だった。

高齢期の孤独感において重要とされる共感性とモラルを、自己と配偶者がともに確保するには、結婚生活の継続の中で相手の人格を尊重した関わりを持ち続ける姿勢が大切である（宇都宮 1999）。

遠藤マツエ（1981, 1982, 1983, 1984）は、3回の調査研究を通じて孤独意識の実態の検討から孤独意識の概念化を試みた。

まず遠藤（1981）は、高齢者の孤独な心の状態をどうすれば把握できるかを考えた。

調査結果からの考察として、高齢者の体の健康感や孤独な心の状態を形成する重要な要因と考えた。

第2章 先行研究の整理

そして、高齢者の年1~2回の曾孫に会う楽しみから、幼い曾孫への愛情の現れ方の裏面には強い孤独感が存在すると考えた。

その他にわかったことをまとめると、

- 若い世代との同居生活か独居生活かという、居住形態の差異による孤独意識は、家族とともに過ごす時間面の充足、なかでも家族とともにする食事の希望の程度に反映されている。
- 高齢者の主観的な孤独意識は、生活全体の満足度に対応する
- 本人の健康間、家族との時間面、特に家族との会話・団欒のあり方が高齢者の孤独意識の形成に重要な要因となっている

ということがわかった（遠藤 1981）。

次に、遠藤（1982）は、日常生活における高齢者の孤独意識の傾向を、対人関係を中心とした各種要因との関連によって知ろうとした。

まず、高齢者の孤独意識に影響する要因としては、居住形態では施設が在宅よりも孤独意識が強く、施設入所年数は2~5年の者が孤独意識が強かった。その理由としては、市近郊の田園地帯に位置するこれらの施設は都市近郊農業価値の多い地域にあり、農業家庭では高齢者の同居形態が多くみられるなかで、施設に対する地域住民の認識は旧態依然たるものであるからである。ちなみに施設はかつてのよう保護老人のたんなる収容の場ではなく、生活の場としての機能を持っている。

次に、子や孫の居住地としては、県内に居住する者が孤独意識が強かった。その理由としては、近親者が県外に居住する場合には、高齢者側にあきらめの心理が働いて現実の環境を受容する生き方をとるのに対して、県内の場合は近親者が近くにいるので会いたいという高齢者側のあきらめきれない状況が存在するからと考えられる。

そして、自覚された健康程度はややよいと感じている者が孤独意識が強かった。その理由としては、孤独意識を形成する重要な要因で、感覚機能の衰えは社会的相互作用が妨げられて孤立しがちになるであろうから、わずかな機能低下が自覚される場合にも本人の心に大きく孤独意識をもたらすからである。

ここで基礎データ別に孤独意識の強い者を挙げてみると、年齢は80歳以上のもの、性別では男子よりも女子、職業の有無では無職者が孤独意識が強かった。

そして、ここ2~3年以内に離別や死別経験のある者が孤独意識が強かった。これは、高齢者を取りまく人間関係に急激な変動をもたらすものであり、これに伴う感情の現れ方は、死別では「淋しい」感情を伴うものが多いのに反して、離別では「以前よりもよくなった」という感情のものが多くみられた。これについて高齢期における死別に伴う感情は、死が身近いことの自覚や、死に対する恐怖あるいはそれまでに持続してきた人間関係が永遠に失われたことへの深い絶望などがある。離別は煩雑で困難な人間関係から適当に逃れることができ、新しい人間関係が形成される可能性をもつことなどによるものである。離別

に伴う淋しいという感情は孤独意識の高いものに著しい。いっぽう、死別の場合には、これに伴う感情経験と居住形態の違い（在宅と施設）によって孤独意識の強さと関連する傾向がみられた。高齢期における生活環境の急激な変化のなかでも、このような人間関係の変動が孤独意識の形成要因として重要であることを示すものである。

以上が孤独意識の強い人たちの傾向である。

いっぽう、一般的な生活行動意欲は、施設よりも在宅が、自覚による健康程度では足が良好な者、性別では女子よりも男子、死別経験のない者よりあるほうに、いずれも高い傾向がある。これら生活行動意欲の高いものについては孤独意識の程度が低いという密接な関連がみられた。

結論として、高齢者の孤独意識は日常生活における行動意欲との関連が大であり、これらの行動意欲のあり方が生活適応に反映するとみることができる（遠藤 1982）。

そして、遠藤（1983）は孤独意識と日常生活における対人関係との関連について、対人接触の実態を調査した。

それによると、生活時間の内容である生活行動について、最近になって獲得された生活行動は殆んどみられなかった。テレビ視聴時間が多く、逆に社会的な生活行動や家族との接触時間の縮小がみられた。

次に、対人接触の対象人物の中、子・孫・嫁および近所の人との接触頻度は、在宅者と施設入所者では明らかな違いがみられ、兄弟姉妹は親戚や友人と同じ程度の接触頻度だった。

そして、高齢者が期待する行動と実際の行動の一致した生活行動は食事、対人接触の際の話題としては健康に関する話題が多かった。

結論として、孤独意識の程度と密接に関連する要素には、生理的生活時間の中でも睡眠のとり方や食事のとり方、余暇的生活時間では特にテレビの視聴のし方があるということがわかった（遠藤 1983）。

そして、遠藤（1984）は以上の結果を踏まえた上で、孤独意識の概念化を試みている。

それによると、孤独意識の概念は、「孤独意識は人間の存在形式によって規定されるものであって、家庭生活および社会生活における対人関係の欠如および人間本来の孤独な存在としての自覚不足から感じる寂しさおよびこれらによってもたらされるところの心の生活状態である」（遠藤 1984: 89）と規定された。

高齢者の孤独意識は、個別には過去との関連で現在があるということだった。

小平広子は、高齢者の主観的健康感や疾病・障害の種類、活動能力等により、孤独感がどのように異なるのかの実証的研究をした。

高齢者に生じる健康障害は、それまでに抱いていた自己概念を失わせ、自己の無用感をもたらす。と同時に、健康障害はそれまでの人間関係をも疎遠にし、高齢者の孤独感を増強する要因にもなっている。孤独は人を自閉的にし、さらに心身の健康を悪化させるというように高齢者の身体と心は他の年齢層より密接な関連性をもっている。

調査から、

第2章 先行研究の整理

- a. 自己の健康観と孤独感との関連では、自分の健康状態をマイナスに観ている人ほど孤独感が強い。
- b. 疾病や障害の種類では、運動器系と感覚器系の疾患及び障害の場合に孤独感が強い。
- c. 活動能力が低下するにつれて孤独感が強くなる。

ということがわかった（小平 1999）。

橋本有理子は、家族内孤立と、その家族との質的關係・孤独感との関係・独居志向性、独居志向性と各関連要因との関係性を調べている。

その考察によると、まず、家庭内孤立の程度が配偶者や子どもへの満足度に与える影響として、配偶者、子ども、子ども配偶者との日頃からの関わり合いの程度が家族との質的關係に影響を与えている。

次に、家庭内孤立の程度が孤独感に与える影響として、まず、社会的孤立は、孤独に至るプロセスであり、結果として大きな苦渋に満ちた感情を引き起こす可能性を有するもので、今回の研究結果を裏付けている。そして、友人の存在や地域社会参加が家庭内孤立による孤独感への影響度を緩和させる機能があることを述べ、その対策として、家庭以外で様々な交流や活動が繰り広げられる生活の場を持つことは重要であると結論づけている。

そして、家庭内孤立の程度が独居志向性の程度に与える影響としては、独居志向性には、ポジティブな側面とネガティブな側面が存在すると述べ、家族に対する意識として、流動的かつ多様性のある価値観が表れたものと結論づけている。

そして、独居志向性の程度が各変数に与える影響、各変数との関係性として、まず配属者満足度、子ども満足度、子ども配偶者満足度からみていくと、「嫁姑関係」の背景には、息子との質的關係が影響しており、嫁姑関係の間で息子が信頼できるような対応をしなければ、対象者はそのような状況に固執することなく、自分一人で楽しむことや家族以外の他者との交流に目を向ける意識が高いとしている。

次に、友人の有無、地域社会参加度だが、独居志向性の高い人は、家族以外の他者や社会との交流を断ち、前述のような独居志向のネガティブな側面として提示した「閉じこもり」状況に至るとは必ずしもいえないとしている。

最後に、孤独感の程度だが、独居志向性の高い人が例え家族内孤立の状況におかれたとしても、家族には頼らずに、自分の生活、時間を楽しむ意識が強く、決して、苦渋に満ちた感情を引き起こすとは限らないとしている。

この論文の結論として、4つの要素をあげ、まず、家族との関わり合いの希薄化は、家族との緊張関係をもたらすものとしている。

次に、友人の存在や地域社会への参加は、家庭内における役割、立場を喪失する恐れがある場合でも、友人の存在や地域社会への参加といった家族外における第二、第三の役割、立場、所属感を獲得することが孤独感を緩和させる要因になるとしている。

そして、家族との日頃からの関わり合いの希薄化に対しては、家族に固執することなく、一人の時間や空間を大切にし、その見つめる先が自分に向けられていれば、場合によっては、「閉じこもり」など、家族だけでなく、社会との断絶にもつながりかねないネガティブな方向性に導かれる可能性もあるが、見つめる先が家族以外の他者や社会であれば、友人との交流や地域社会参加などきわめてポジティブな方向性に発展するものとしている。

最後に、これまでの研究で提示されているような「家族内孤立→孤独」という図式だけでなく、「家庭内孤立→独居志向性の獲得→孤立の緩和」という図式が認められる可能性がある。このように、家族との日頃からの関わり合いの希薄化という状況下で、本人の家族内外における身の置き方如何によっては孤独感に影響を与えるものとしている（橋本2003）。

原田寛子は、徳島県内における老人の自殺死や孤独死の実態と原因を探っている。

徳島県や山陰地方のある県では、過疎化が年々進んでいるが、この徳島でも特に南側地域のもつ四季を通じて快適な自然環境と人情豊かな地域住民の連帯からもたらされる“土の持つ暖かさ・安らぎ・癒しなどの自然環境”が、自殺防止への人為的努力を超えていると仮定している。

そして、“南北相対する県民性の相違”が、“恵まれない生活環境下での老化→孤立→孤独死あるいは自殺死”へと辿る道となんらかの相関性をもつのではないかと仮定し、調査をした。

分析結果としては、まず、自殺死ゼロ地域の多くは、南側地域にあるという結論が出た。

徳島では昔から「吉野川流域をとりまく“北側地域”と、四国山脈からそれを越えて太平洋に至る“南側地域”で、その住民の気質にかなりの差がある」と指摘されている。この「南北相対する県民性の相違」という地域の特性、ひいては潜在能力が、地域の老いの支えに深く貢献している。

すなわち、地域のすべての人々、そして山河・空気・太陽—森羅万象が心身を癒す一方で、現代の経済面での問題が心の健康に重くのしかかり、老人の自殺死・孤独死と深く絡む原因になっている。

その他にわかったこととしては、

- 高齢化・過疎化が進む町村が、孤独死ゼロ
- 孤独死・自殺死ゼロの地域に共通の因子は、高齢化率が比較的高い、あるいは最高に高い
- 年齢階層別の老人自殺者数は、80歳以上が多い
- 市部混住地域での独居老人の孤独死が急増している
- 老人の自殺死は縊死——首をくくって死ぬこと——が多い

ということだった。

第2章 先行研究の整理

補足として、自殺死ゼロの海部町には、藩政時代から地域の老いを支えるネットワークが、今に生きている。それは、古くて新しい年齢階層別の相互扶助組織、言わば“朋輩制度”である。

この存在は海部町に限っておらず、徳島県の南部・海部郡6町村には、1グループが10人程度の朋輩組が、地域に数多く結成されている。この朋輩制度は村人で組織されており、当主が家族の代表として出席しているとのことである（原田 2000）。

三宅俊治らは、孤独感との関連から高齢者の不安を分析している。

その結果としては、まず、どの群変数においても、人間同士は理解・共感できないと感じている人ほど高得点となるLSO-U得点、個別性に気づいていないと高得点となるLSO-E得点は共に有意差を示さなかった。

次に、高齢者の多くが、人間同士は理解・共感できると感じていた。

LSO-U得点と不安尺度を高齢者に適用するため、それらに対する6段階評定値を因子分析（主因子解）し、因子を抽出した達成不能得点の間にそれぞれかなりの相関が見出せた。

これと同様にそれぞれ抽出した真解消的不安得点、達成不能不安得点にはそれぞれ優位性が見られた。多重比較の結果、神経症的不安得点ではC型>D型が、そしてまた、達成不能不安得点ではC型>A型がそれぞれ明らかになった。

更に、LSO-Uによってのみ、神経症的不安得点にも、また達成不能不安得点にも差が認められた。

これらのことから、人間同士は理解・共感できないとする孤独感が、神経症的不安ならびに達成不能不安を大きくしているということがわかった（三宅ほか 1997）。

山縣文治は、どういう社会状況にある老人が“孤独”を感じるのかを明らかにし、それをもとに“孤独”から解放したり、“孤独”に陥らないための予防法を探っている。

調査結果を述べると、第1の問題として、〈女性よりも男性の方が寂しさを感じやすい〉ということがある。

一般に男性の一人暮らしにはさまざまな日常生活上の問題がつきまとう。たとえば、家事能力の問題。男が家事をやる経験が少なかったために、それを他者に委ねられる傾向がみられる。

それを他者に委ねる場合、非公式的な人間関係が重要になってくるが、男性は一般に仕事中心の生活をしがちであり、地域的な結びつき、とりわけそれが個人的なレベルの問題となると関係は薄くなる。その結果、家事援助、日頃の話し相手等において、男性は親族中心の援助網になりがちで、それ以上の地域的な広がりはない。公式の援助システムは利用料の高さなどの問題があるため、男性一人暮らし老人にとって、極めてその置かれている環境は厳しい。このように孤立しがちな環境が、寂しさという精神的に不安定な状況に結びついているものと推察される。

次に、これは老人の一人暮らしにおいても避けて通れない問題で、第2の問題として、〈社会・人間関係の希薄さが寂しさを生む〉というのがある。

このような寂しさを解消させるのに、最も重要な役割を果たすであろうと一般的に考えられるのは、家族や親族であるが、しかしながらこれは、毎日のように接触がないかぎり、寂しさを解消させるものとはならず、そして毎日接触のあるような状況は完全な一人暮らしになっていないということである。

それに続いては、日常生活での地域社会や友人知人とのつながりが、社会生活の広がりを生じさせる。

さらに、様々な形で自分自身の生活を他者に依存することの少なくない一人暮らし老人にとって、社会福祉制度やサービスとの結びつきが必然的に起こってくる。

そして、サービスと結びついているものは一様に寂しさ感が強いにも係わらず、寂しさ感が少ないという方向については、利用が集団的、あるいは利用の場では集団を求められることが多いところでは寂しさを感じることも少なく、利用の方法が個別的で、対人関係的援助であるところについては、寂しさを感じるものが逆に多い。つまり個別的なかわりを求めざるを得ない状況にある一人暮らし老人の置かれている精神的空虚感は、それを利用してなおかつ十分に寂しさの解消にはならないのである。また、サービスを求める者ほど寂しいと思う者が多く、寂しさを感じる老人が、あらゆる場面で、方法で社会関係の広がりを求めている。

以上のように、一人暮らし老人の寂しさ感は、一人暮らしであることがもたらしやすい社会関係の狭窄化—社会的孤立—に由来する可能性が高い。一人暮らし老人はすでに社会生活の広がりを阻害されやすい状況に位置づけられているのであり、そのような中での寂しさ感が形成されている。

老人と孤独あるいは社会的孤立に関する近年の多くの調査結果は、すでに検討したように、その関係についてむしろ否定的な結論を導くものが多い。しかしながら、少数ながら孤立している老人や孤独を感じている老人が存在しており、これらの老人が極めて深刻な問題を抱えつつ日々生活をしているということは事実で、現に一見豊かに見える豪華な有料老人ホームに自殺者がかなりあるという一般にはあまり知られていない厳然たる事実がある。

結論として、一人暮らし老人を寂しさから少しでも解放する施策は、実年期までの社会関係を以下に維持、継続させるか、あるいは老年期への準備段階において、就労中心の社会生活にいかに変化をもたらすかである（山縣 1987）。

米沢弘恵らは高齢者の孤独感と活動状況との関係を明らかにしている。

この調査の結果からの考察としては、まず孤独感に性差はないということがあった。

配偶者の存在については、庭の手入れ一つにおいても見てくれる妻がいなければ、する気になれないほど気力がなくなり、孤独感を増大するといわれている。となると、普通は配偶者がいることによって生活に張りができることから、社会的孤立や孤独感を提言することが推察されるが、本調査の結果では、逆に配偶者のある者のほうが孤独感が強かった。そして独居が孤独感には直接関係しないという結果はこれまでの先行研究の報告と同じだった。

第2章 先行研究の整理

次に、健康でない者は、人との交流、社会参加の機会が減少し、孤独感を抱きやすいということがわかった。病気と孤独感については、医療の対象となる不調をもつ者や精神的健康度が低い者に孤独感が強いというこれまでの先行研究の報告があるが、結果は逆だった。

そして、ADL——日常生活動作能力——については、高齢になると聴力等、身体的機能が低下し、家庭においても、社会においても他者との交流が途絶しがちになり、社会的孤立を招いたり、無力感に襲われたり、また、抑うつ的になっていく。そして、孤独感には、社会や他社とのコミュニケーションが果たす役割の大きさが影響している。ちなみに「尿もれ」による精神的ダメージは、男性のほうが受けやすいという調査結果が出ている。

最後に、老研式活動能力指標と孤独感得点については、性による差はみられなかった。しかし、最も活動範囲の狭い状況にある「寝たきり」では、他の活動範囲に比べ、女性では最も孤独感得点が高かったが、男性では逆に最も孤独感得点が低かった。ここから、活動範囲が狭い者ほど孤独感得点が高いとはいえない結果であったことから、活動範囲の違いが孤独感を異なったものにするのが推察できる（米沢ほか 1999）。

以上、孤独についていろいろと挙げてきたわけだが、次に具体的に解決手段を挙げていこう。

2.2. 孤独を癒す手段・その1 ～高齢者同士のふれあい～

高齢者は死期を目前に控えることから、孤独感に苛まれるといわれている。それを癒すには一体どうすればいいか。まず、高齢者同士のふれあいからみていこう。

西田香津美は高齢化の進む都会で行われたサロン活動について書いていて、障害や痴呆症状をもつ高齢者を集団の場に誘い出すことで、「閉じこもり」をなくし、遊びリレーション（遊びとりハビリレーションの造語）を通じて仲間作りやボランティアとのふれあいを進めていくことを目的とするものである。

これが行われたことで高齢者は、

- 外出場所ができたことで「閉じこもり」が解消した
- 生きる意欲が出てきた→寝たきりから脱却できた
- ゲスト同士が顔見知りになると仲間意識が芽生えた。「障害をもっても当たり前に住み慣れた地域で暮らしていくことが幸せ」とわかった
- 参加者として能力に応じてできることは手伝ってもらうことで生きがいを感じ、参加意識も高まる

というメリットがあり、家族は

- 本人の様子を客観的に見ることができ、かつ介護の方法が具体的に理解できる
- 同じような家族を知ることによって孤立感がなくなる→家族関係も良くなった

のメリットがあった（西田 1997）。

次に、山村久は高齢者を孤独から解放し、ふれあいのある老後を送るための方法の一つについて述べている。

外国では、集団生活で改善が見られなかった情緒不安が、ある家族の中で生活することにより、著しい好転をみせたという事例がある。

このような「グループ居住」の真髄は、その擬似家族制にあり、擬似家族の社会化こそが自己実現を獲得する有効な手段である。

なぜ「グループ居住」が必要なのか。その理由は、日本の住宅事情と高齢者の実態にある。日本の従来の住宅は、いわば若い家庭向きに建てられてきたため、多くの高齢者が住まいに悩んでいるのである。それだけでなく、高齢になると、食事、洗濯、掃除や買い物などに困難が生じ、子供が巣立った後の空室の多い孤独な住まいが、生活に不安の影を落としていく。

そのような日本の住宅を高齢者向きに移行するためには次の3つが必要だ。

第一に、高齢者の住居そのものをもっと作る必要がある。社会的入院という言葉があり、家庭や住宅事情からやむをえず病院や施設に入っている人たちが大勢いる。

第二に、住居をもっと高齢者の生活に適した環境に整備する必要がある。なぜなら、家庭内事故は交通事故よりも多いから。

第三には、高齢者世帯のうち「一人暮らし」の人が2割を超えており（今後さらに増加する見通しだが）、一日中会話のない人も多い。

その他にも、居住環境は精神的な変調や痴呆症の原因として懸念されるし、高齢者にとってこそコミュニティの回復が大切なこととしてあげられる。

共生型住まい（「ふれあい型」グループホーム）の良さは、生活の一部を共有しつつ、みんなが必要な生活や福祉的機能の仕組みを作っていくもの。これは救助船に似て、ここには何よりも大切な「人の温もり」があって、私たちが本来持っている知恵や勇気を奮い立たせてくれる。

本来は痛みである「老い」も、共有すればその辛さが逆に共感する原動力、つまり「生きる糧」になり得る。

最後に“家族同様の「ふれあい」”の定義について、筆者は、

では、家族同様の「ふれあい」とは、どんなことを指すのでしょうか。

①「気兼ねなく、のびのびと暮らせること」

高齢者でなくても、相手に遠慮して、我慢しながら暮らすようでは、いい家族とは言えないと思います。

- ②「自分を受け入れ、自分らしく生きることを支援してくれる」
世の中に自分を認めてくれる人がいることの心強さは、はかり知れないものです。
それは「生きがい」に通じるものだと思います。
- ③「相手の存在や活動が、自分にとっても喜びとなる」
「思いやり」こそが《愛》の根源ではないでしょうか。

と述べている（山村 2003）。

その他には、箕浦時子らは誕生日祝いの効用について述べている。

誕生日祝いの利点は「高齢者にとっての誕生日祝いは、みんなで祝うことが利用者同士の交流の機会となっている」「利用者と職員にとって良い節目となっている」「誕生日祝いの対象者となった利用者に日頃みられない笑顔がみられる」「お化粧や身だしなみに気を使う」など。誕生日祝いに保育園などの園児との交流を持っている施設では、利用者が感激して涙するなど普段みられない利用者的一面が観察されており、利用者の心の活性につながっている。

いくつかの施設は、「祝い内容に新鮮さが失われている」「職員の独りよがりになっている」「誕生日祝いを認識できない程度の痴呆のある利用者に喜んでもらえているかが疑問」といった課題や、誕生日は単に生年月日であり、祝われる日とは認識していない利用者や、長寿を喜ばしいと受けとめられず老いることを恥じている利用者もいるが、「高齢者の誕生日祝いは、来年も祝える保証はできないので大事に継続していきたい」という意見に代表されるように、誕生日祝いの注視・廃止を検討しているといった記述は見あたらなかった。

総じて、誕生日祝いの目的としては、長寿の祝福であり幸せ・生きがい・楽しさを感じられる機会の提供が主たるものであり、これは老人ホームにおけるケアの目的と一致している（箕浦・新田 2003）。

2.3. 孤独を癒す手段・その2 ～子どもとのふれあい～

次に、子どもとのふれあいが高齢者の孤独を癒す例を挙げる。

大倉喜代美は、「祖父母との同居が減ってきている今、高齢者と子どものほのぼのとした温かいふれあいの光景を都会で見ることが少なくなった」（大倉 1997: 59）。と述べ、校長を務める彼女の小学校で実施した“高齢者とのふれあい給食”の意義を主張している。これは、この小学校の学区域にある2つの敬老会の老人たちを日頃から運動会や学芸会などの学校行事にも招待し、交流を図っていることの一環として行われているものである。ちなみに実施時期は敬老の日の直前である。

敬老会の方々は学校に来ることをとても楽しみにし、楽しい会話と笑顔がいっぱいの交流が毎年続き、中には子どもを家に招待する老人もいる。この試みは成功しているといえる（大倉 1997）。

栃木県真岡市では、「おじいちゃん保父制度」があり、「核家族化が進む中で、子供たちとお年寄りとのふれあいの機会をつくろう」（— 1999: 2）というコンセプトで 1998 年 10 月から始まった。

そしてそれは保育所職員・保護者・子供の誰にも大変好評である。それは子供に「祖父のところに遊びに行きたがる」という効果をももたらし、この試みは大成功と言っていい。

おじいちゃん保父の一人は『『とても楽しい』『元気の素』『もっと地元のシルバーが立ち上がって、地域で子供たちを育てていくようになればいい』（月刊福祉編集部 1999: 2）と語る。

これは子供たちがお年寄りとのふれあいを学ぶ機会であると同時に、経験豊富な地元のシルバー世代がもう一度活躍できる場にもなり、世代間の格差をなくす一つの方法でもある。

理事は『『子供たちにとって家庭で少なくなった高齢者との交流を図ると同時に、高齢者の生きがいつくりにもつながる』（月刊福祉編集部 1999: 2）と語る。

これは定年退職しても働く意欲のある高齢者を活かし、かつ退職後の生きがいを提供する、一つの事例であろう（月刊福祉編集部 1999）。

関好博は、富山県高岡市で行われている“ジュニア福祉活動員”制度を考えた人で、これは社会人と小学生による独居老人宅の友愛訪問活動である。

この事業の高齢者への成果に対して、関は「高齢者にとっては、児童らの見守りにより孤独感も和らぎ、安心感が得られたことや、交流が深まることで近隣の住民とも自然とあいさつを交わせるようになるなど、住みよさと助け合いの気風が増したことでであろう」（関 2000: 111）と述べている。

このことから、少なくとも子どもとのふれあいには一定の効果のあることが認められた（関 2000）。

河地良一は、昭和 58 年度から道内 14 市町村に北海道教育委員会の実施している「少年と高齢者のふれあい促進事業」を自身の論文で紹介している。これは「子どもたちが高齢者とのふれあいをとおして、高齢者のもつ豊かな経験や知恵に学びながら、尊敬と思いやりの心を育てる体験学習の場を拡充する」（河地 1986: 21）ために行われたものである。具体的には、

- 労作体験学習
- 生活伝承学習
- 遊びの学習

の 3 つである。

この試みの行われた中で、高齢者の感想を抜粋すると、

第2章 先行研究の整理

楽しみが増えてきた

ババだちのあの嬉しそうな顔

今一番楽しくて体にいい。長生きするね。年寄りの覚えていることを教えて、子どもだちが、この村にのこるのであれば、なんぼでも教えてやるつもりだ（蛸崎東一郎・71歳。奥尻町）

子どもたちと一緒に行動していると自分の孫のように思えてきた

子どもたちと一緒にやるのがこんなに楽しいものかと思った

お互いに認め合い、交流を深め、道端であっても礼をしあうようになり（門脇キン・78歳。上川町）

事業の成果として、高齢者が自分の持っている知恵や技術を伝える喜びが、生活に張りをもたせ、社会参加の気運にもつながっていった。これは世代を超えた地域の連帯感につながる活動にも広がっていった。

一般に高齢者は一度退職しても働く意欲のある者が沢山いるといわれている。それを活かさない手はなく、そういう意味ではこれは非常に有意義な試みであるといえよう（河地1986）。

その意欲のある高齢者を活かす手段の一つとして非常に実効性の高いものが、「おじいちゃん保父制度」のところでもとりあげたが、“老人ホームへの訪問などによって幼児と高齢者をふれあわせること”である。

關戸啓子は、「核家族化が進み、急速に少子高齢化社会を迎えようとしている現代においては、さまざまな人とふれあいながら人間関係を体得していくというごく自然な成長発達の基盤が崩れているということなのである。特に幼児期における体験は、その後の人生に与える影響が大きいと考えられている」（關戸 2003: 195）と、現代社会を生きる子どもをとりまく環境の問題点を指摘している。その問題を解決することにおいて、“老人ホームへの訪問などによって幼児と高齢者をふれあわせること”の一番の長所は、高齢者のふれあいと幼児の情操教育という一石二鳥の効果が望めることである。

この論文で興味深いのは、本論文のテーマである“ふれあい”を定義づけているところだ。以下にその部分を引用する。

幼児と高齢者が単に同じ場所にいるとか、物理的に顔を合わせている状況をいうのではなく、幼児と高齢者が一緒に笑ったり気持ちが共有できるような交流を「ふれあい」という。

すなわち、バーバル・ノンバーバルに、相互に交流することによって、そこに対人感情を伴うような人間関係が形成される状況を「ふれあい」という。（關戸 2003: 196）

全国の幼稚園・保育園に対して行った調査では、“幼児と高齢者のふれあい”については概ね肯定的だったが、高齢者とのふれあいだけが影響を与えるわけではないという意見も

あった。しかし、これは「幼児は育つ環境全てから影響を受けているのであり、高齢者とのふれあいだけに関してのみ質問されて、回答者が戸惑うのは当然であろう」（関戸 2003: 200）という筆者の見解からも、質問の仕方が少し不適當であったと思われる（関戸 2003）。

最後に、竹内幸男は、子どもとふれあうと高齢者に「生きがい」が育つか、施設に入所している高齢者の「生きがい」の違いについて考察している。

まず、氏は子どもたちと高齢者とが触れ合うことにより、世代間の交流が図れる。と考え、高齢者の側から考えると「生きがい」が育つのではないかと捉え、複合施設の高齢者と普通の施設の高齢者との「生きがい」についての比較を行った。

結果として、「生きがい全体」については、両施設の高齢者の間に差は認められなかった。

複合施設の高齢者は子どもたちに関わりたい度合いが強く有意となった。これは、高齢者にとっても子どもたちと触れ合う機会を持ちたいという証しであり、両者にとってメリットとなる結果である、という結論を出している（竹内 1999）。

まとめると、子どもとのふれあいは

- 高齢者にとって孫にあたる世代と絆を作るという意味で世代間の格差をなくす。
- 孤独感も和らぎ、安心感が得られたことや、交流が深まることで近隣の住民とも自然とあいさつを交わせるようになるなど、住みよさと助け合いの気風が増した。
- 高齢者は一度退職しても働く意欲のある者が沢山いる。退職後の生きがいを提供する。高齢者の生きがいづくり。
- 定年退職しても働く意欲のある高齢者、経験豊富な地元のシルバー世代がもう一度活躍できる場を与える。
- 高齢者が自分の持っている知恵や技術を伝える喜びが、生活に張りをもたせ、社会参加の気運にもつながっていった。これは世代を超えた地域の連帯感につながる。

という効果がある。こうして見てみると、メリットはあれど、特にデメリットは見当たらない。デメリットといえば、全てのお年寄りに子どもとふれあえる環境を作り出すことは難しいということぐらいであろう。

2.4. 孤独を癒す手段・その3 ～地域でのふれあい～

最後に、地域でのふれあいについてみていこう。

畔上元栄は東京都日野市の行った「高齢者ふれあいレクリエーション」「いきいき体操」について書いている。前者は、年に1回・敬老の日に行われる「笑いがはじけ、ふれあう楽しさをねらった楽しいレクリエーション」として、言葉通りのもので、健康体操や歌・昼食会・おたのしみ会などの催しで高齢者同士・そして子どもなどの若い世代とのふれ

第2章 先行研究の整理

あいをねらうもの。後者は前者の延長線上で高齢者が体を動かす機会を作るために約1ヶ月1回行われる、集団で体操をする催しである。

この論文で興味深いことが書かれていた。

「私たちが知る限り、お年寄りが集まる場所は、本当にお年寄りばかりで、若者はもちろんのこと、婦人や子どもたちがいっしょになってつどいを作ることはほとんどありません。お年寄りたちは、世代の違う人たちとの交流が少ないのです。逆にいえば、若い世代にもお年寄りとの交流がほとんどありません。ですから三世代がつどいふれあうことは、どの世代にも求められているのではないのでしょうか」

これは盲点だった。世代間の交流の欠如は薄々感づいてはいたが…。そういえば近所の公民館での集いでも高齢者なら高齢者だけだった。

『いきいき体操』の参加者で多いのは70歳以上(約6割強)、女性(約9割強)だった。

結果として、「高齢者の健康づくりに貢献するとともに、地域のコミュニケーションを促す機会を作ることができた」課題も沢山あるが、卒論のテーマに関連するものとして、結構多くの人に参加しているものの、「参加者が日野市の高齢者の約3%にすぎない」ことがあげられる。

しかし、高齢者にとっては、地域の人とふれあい、一緒に健康づくりに取り組むという一石二鳥の催しであるのは間違いない(畔上 1992)。

そして、古川秀敏らは米国ハワイ州に住む日系高齢者を対象に、孤独感、抑うつ、およびそれらに関連する要因を調査し、実態に即した高齢者対策を考察している。

その調査結果によると、この集団(米国ハワイ州に住む日系高齢者)は心理的に充足しており、生活全般の質(QOL)が高い。

主観的な健康感抑うつと強く関連しあい、ひいては、孤独感につながる事が推測される。

主観的に健康でないとする高齢者には、心身両面からの社会的援助が必要である。

高齢者が心理的に健康な生活を送るためには、余暇活動やボランティア活動など、社会活動を行うことの重要性がわかった。

高齢者対策においては、認知機能の低下を予防すること、認知機能に障害をもつ高齢者に対しては、地域住民と密接な交流を維持するための工夫等、つまり行き届いた地域社会の支援が高齢者の心理的な負担の軽減に重要である。

わが国の高齢者対策は、地域社会における密接な交流やそれを可能とする環境の整備の観点からの支援も講じる必要がある(古川ほか 2004)。

その他にも、大川嶺子らは住民主体の地域づくりのモデル島として関わっているK島において、高齢者の生きがいづくり活動「ふれあい広場」誕生までの経過から、利便性の高い離島における生きがいづくりについて考察している。その調査結果と考察をまとめると、以下ようになる。

1) 神事を生きがいづくりに積極的に活用することの重要性が示唆された。2) 介護の支え手の乏しいK島では、地理的利便性を生かし「郷友会」を介護マンパワーとして活用す

ることで、高齢者の生きがいつくり展開の可能性があると考える。3) 住民主体活動としてのグループ討議は、個々人の「高齢者ニーズ調査」結果を基礎にし、ニーズに基づいた「ふれあい広場」活動の準備、実現に繋がった。4) 高齢者の生きがい作りの場として誕生した「ふれあい広場」は、島内の交流の拠点にとどまらず、利便性を生かして島外施設入所者の生きがいつくりの場、郷友会など島外生活者のふれあいの場など、島外との交流の拠点としての展開を期待したい（大川ほか 2004）。

以上、孤独を癒すための考えられうる 3 手段について考察したわけだが、しかし、高齢者の知り合いも、子どもも、地域社会との接触もない高齢者もいるだろう。そんな場合はどうするのか。そこで私の提唱するのは《ペットとのふれあい》である。

2.5. 高齢者とペット飼育 ——動物の場合——

さて、今回の論文の本題ともいうべき部分であるが、最初になぜ高齢者がペットを飼うのがいいのかということから述べていきたい。

まず、荒砂卓巳の論文によると、最近、第 3 次ペットブームの到来でペットを飼育する人が増えているという。その根底には少子化や核家族化による独居高齢者などの増加があるそうだ。であるからして、ペットを飼育するニーズは今後も拡大する可能性は高いという。

普通ペットといえば“番犬”“愛玩動物”という役割・意味合いが強いだろうが、最近の飼い主はペットに“癒やし”を求めているというのはよく聞くことである。その“癒やし”とは何かというと、“家族の一員”として飼い主と精神的に深い繋がりを持ち、昔はそれこそ“番犬”“愛玩動物”という、悪く言えば人間のための道具でしかなかったものを今は人間並みに扱うということだ。これは都市化や高度情報化などの社会変化で家族や地縁などの人間関係が希薄になった結果、「人間によってペットは少子高齢化社会に引きずり込まれた」（荒砂 2004: 77）とあるが、その通りだろう。

この論文の結論として、高齢者がペットを飼うのは近年社会構造が変わって希薄になった人付き合いのなさを補完するためであるということだ。もちろんそれだけではないだろうが、それはかなり大きいウエイトを占めていると思われる（荒砂 2004）。

それに加え、山口千津子が論文の中で指摘していることは、動物とより強い関係を持つとともに暮らす人が増加しているのは、先に述べた少子化や都市化とともに屋外から屋内への飼育形態の変化も関わりがあるということである（山口 1999）。

そして、高齢者とペット動物に関する研究の現状を概観として、安藤孝敏の論文を参考にしたい。安藤は、HAB（人と動物との絆）という新しい研究分野の主要な部分を占めている高齢者とペット動物に関する研究の現状を概観している。

まず HAB 研究の分類として、

第2章 先行研究の整理

1. ペット動物の飼育が高齢者にもたらす効果に関する研究
2. アニマルセラピーに関する研究 ①アニマル・アシステッド・アクティビティ ②アニマル・アシステッド・セラピー
3. 高齢者のペット動物飼育に関する研究
4. 老年期のペットロスに関する研究

の4つに分けられる。本論文ではこれに従い、1番から順に検証していく（安藤 2001）。

まずは1番のペットを飼うことによる効果についてだが、高齢者がペットとともに暮らすことに対する肯定的評価は、欧米の研究者や高齢者を抱える家族から報告されている。ここで本論文の重要部分を占める、“高齢者がペット飼育をすることによる効果と問題点”が書かれている具体例として、山口の高齢者とペットとの関係・健康への影響・どの高齢者に対して効果的か等の問題点を明らかにするためのアンケートの実施結果をここにあげたい。

主な結果として、

- 健康効果は親密度に関わる（動物の種類は関係なし）。それはペットに話しかけるだけでもよい
- 同じ高齢者でも動物飼育経験のある高齢者だとより効果的になる

という結果が出た。問題点として、

- 動物に対して虐待行為をする高齢者もいる（原因は高齢者の身体機能状態、精神的安定）
- 飼育動物の死による精神的打撃は親密度が高いほど大きく、その後、飼育をやめてしまう高齢者も多いが、死を経験するのがはじめてではない高齢者が多かったため、飼育をやめてしまうほど、あるいはうつ状態を引き起こすほどの経験をしたと回答した家庭は少なかった

というのがあった。しかし全体的に、動物とともに暮らすことは高齢者の心と身体の健康によく、高齢者の毎日の生活を豊かにするということが報告されている（山口 1999）。

まず“高齢者の健康生活とペット飼育”という論文から見ていこう。この論文のテーマは“自分の役割”と“生きがい”。そしていつまでも健康で楽しい生活を送るための原動力の一つとしてペットとの関わりを挙げている。

この論文で一番頷かされたところは、なぜペットが高齢者にとって有用かという理由が具体的に書かれていて、

さりげなく側において、押しつけがましい言葉も言わず、冷静に受け入れてくれるペットの果たす役割は大きい。無言のうちに励まされ、心が癒されていく。ペットは高齢者の孤独や孤立、喪失感の緩和に特に効果を発揮する（（著者不明） 1999: 22）

とあった。後半部分だけなら後にあげる“ペットロボット・ぬいぐるみ”でもいいのかもしいないが、前半部分は多分ペットにしかない効果である（なぜならペットは人間の言葉を喋らないし、人の気持ちや言葉のある程度までしか理解しないから）。

他にも、『自分の役割』や『生きがい』を持つことが、いつまでも健康で楽しい生活を送るための原動力になると指摘（（著者不明） 1999: 20）し、牛を育てて金を稼ぐ 78 歳のお年寄りの話を例に挙げ、「ペットの世話という役割を持ち、その生活に充足感を得ている高齢者にとっては、ペットの存在が健康づくりに大きく関与してくる」（（著者不明） 1999: 21）と、その効果を強調している。

さらに、具体的なデータをあげて「家族や知人、近隣との円滑なコミュニケーションや、クラブ活動への参加など、社会的ネットワークと健康との相関関係を示したデータでは、どの年代においても、社会的ネットワークが少ない人のほうが、多い人に比べて死亡率が高い」（（著者不明） 1999: 21）と指摘し、「ペットはコミュニケーションを円滑にする、社会的潤滑油効果がある」「動物好きならば、動物を介した社会的ネットワークを作ることができる」（（著者不明） 1999: 21）と結んでいる。さらに、「ペットが好きな人にとっては心豊かな生活を送るための重要なキーワード」「ペットとの生活をいつまでも楽しみたい、『だから生涯現役でいたい』と思う気持ちは、高齢となった飼い主の自立と健康に有効な効果をもたらしてくれる」（（著者不明） 1999: 22）という言葉でもわかるように、ペットの好きな人やそれが高じてのペット飼育経験のある人にとって、ペットとの生活は心身ともに健康な生活を送るためのカギを握っているといっても過言ではない（（著者不明） 1999）。

次に 2 番のアニマルセラピーについてだが、アニマルセラピーとは高齢者をペットとふれあわせることで、精神的な治療法の一つにもなっている。

齊藤具子らはコンパニオンアニマル（ペット）の飼育が高齢者の健康維持につながるかを、在宅高齢者を対象に調査している。

まず、この論文のキーワードである“*IADL*”について説明したい。*IADL*（*Instrumental Activities of Daily Living*）とは、*Lawton* らが開発した尺度で“手段的日常生活動作能力”という意味で、わかりやすく言えば“社会適応能力”のことである。

結果として、

- 男女とも年齢とともに“*IADL* 障害なし”は減少、男女別ではその減り方に多少の違いが見られる
- 現在のみ飼育している者は犬、過去のみ飼育していた者では猫の割合が大きかった

第2章 先行研究の整理

というものが出た。

考察として、以下の5つのことがわかった。

- コンパニオンアニマルを飼育している者の ADL（日常生活動作能力）レベルは、飼育していない者と比べて1年後にも低下しない
- ADL と IADL の間には強い関連性がある
- 現在の飼育年数、過去の飼育年数の長い者は、飼育経験がない者に比べ IADL の障害のない割合が大きい傾向があった。しかし飼育年数の長さには比例していない
- 犬を飼育している者は IADL の障害のない割合が大きい。なぜなら、犬を新しく飼い始めた人々の散歩時間が、猫の飼育者に比べて著しく増えるから（しかし犬の飼育者と猫の飼育者の間で ADL レベルに有意な差はなかったという Parminder らの説あり）
- 一日のうち少しでもペットにふれる者・ペットに対して好意的な感情をもっている者の方が、飼育経験がない者に比べ、IADL の障害がない割合が大きい。過去の愛着度に関しては、逆の結果であった（これは実際にコンパニオンアニマルの世話をするとするような物理的な面が IADL に関連しているように思われた）

以上のことから、高齢者の IADL と関連する要因としては、①犬の飼育、②日常的な接触、が考えられた（齊藤ほか 2001）。

そして3番の高齢者のペット動物飼育に関する研究についてだが、Hart, Lynette A. は、ペット効果とより効果を上げるための具体的な方法について述べている。

ペット動物の高齢者に与える影響として、大きい順に①生活満足度、抑うつ状態、孤独感といった「心理的效果」②生存率、通院回数や薬の服用、日常生活動作能力などの「身体的・生理的效果」③社会関係、社会的活動、日常会話の内容といった「社会的効果」の順であった。また、そのような効果や影響がみられないという結果もあった。

ペットを飼うことの効果として、ペットを飼うことによって男女を問わず、独立した生活をずっと長く続けていくことができるというのがあった。そして、人がペットを飼って有益かどうかは、その人の人生の経緯（ペット飼育経験の有無、動物が好きか嫌いか）によることもわかった。今まで飼ったことのない人に犬を飼わせると、犬を飼っていることでストレスが増大することもある。なぜなら、ペットを飼うということは、ペットが加わるだけでなく、様々な義務も加わるからだ。だからペットを飼うことによって人々の生活がより難しくなることもある。

さらに興味深いこととして、独り暮らしでない女性ではペットの影響はなかったが、独り暮らしの女性で、ペットを飼っている人と飼っていない人を比較したところ、元気さに差があった。そして、非常に傷つきやすい人に限って見たところ、これらの人々にとってペットは精神衛生上のメリットがあった。その上、なぜペットを飼っている人の方が医師

を訪れる回数が少なかったかという理由は、ペットによる緩衝作用、つまりペットは、特に傷つきやすい人たちが困難な状況に直面した時に人々を守る働きをしているからだ。それに動物は人間の奥底の何かよいものを引き出し、人を落ち着かせる効果も持っている。

性別でお奨めのペットとして、介護者の女性が猫を飼っている場合、圧迫感が少なかった。猫は人に要求することが少ないので、これらの女性にとっては良いペットになった。逆に男性にとっては犬が精神の安定を得るのに最も役立った。

あと、ポケットペット（ウサギやラット、ハムスターなど）もお奨めだという。なぜならそれらは

- 静かで、柔らかくてふわふわしていて、吠えないし家具をひっかくこともない
- 非常に良く人に慣れる
- ケアが簡単
- マンションで飼う場合や、体力のない高齢者にも飼いやすい
- 餌の量が少なく（＝必然的に経費も少なく済む）、必要なスペースも騒音も少ない

からだ。逆に、

- 飼育方法やケアを指導する人がなかなかいない
- 寿命が短く、高齢者がショックを受ける回数が増える（対処法として複数の動物を飼う）

というデメリットもある（Hart ほか 1996）。

安藤らは、都会、地方に住んでいるペットを飼っている老人を比較し、地域老人におけるペット所有状況とペットの交流についての検討を通じて老人とペットとの関係を明らかにしている。

結果は、老人の約 3 割がペットを所有し、ペット所有率は米沢で有意に高く、両地域とも、男性では年齢の低い者でペット所有率が高くなる傾向がみられた。所有しているペットのうちもっとも可愛がっているペットの種類については、両地域とも犬が多く、次いで猫であった。

ペット所有は同居子ありの者に多く、同居家族数が多かった。情緒的一体感を有する者の比率は世田谷で有意に高く、それに関連する要因は年齢と同居家族数であり、情緒的一体感を有する者はない者に比べて年齢が低く、同居家族数が少なかった。

これで考えられることは、同居子の存在がペット所有に関連するということだ。だから同居率の高い米沢でペット所有率が高いという言い方ができるが、これまで出た結果から推測すると、ペット所有は自身の選択というよりは、むしろ同居子もしくはその家族の選択による可能性が大きいことを示唆している。

第2章 先行研究の整理

そしてペットに対して情緒的一体感を感じるということは、ペットを情緒的な関係を取り結ぶことができるパートナーとしてとらえているということである。そしてそれは世田谷では米沢に比べてその傾向が顕著であった。

結論として、大都市と地方都市に居住する老人では、ペットのとらえ方が異なるということである（安藤ほか 1997）。

4番の“ペットロス”について考えてみたい。

まずペットロスという語句の意味について定義しておきたい。これは“これまで飼っていたペットをペットの死によって失う”という意味である。

まず、鷺巣月美の論文では、高齢者がペットをなくした悲しみについて深く切り込んでいる。

ペットというのは高齢者に限らず、人間を癒してくれる存在であるが、生き物である以上常に死ぬ可能性がつきまとう。ということは高齢者がペットを飼うということは悪く言えば高齢者が死を紛らわすための一時凌ぎにしかすぎず、根本的な解決にはならないということだろうか。

もっとも、高齢者は長く生きている分、何度も他人や動物の死を経験しているであろうから子どもよりは大丈夫なのかもしれないが、それでも

- 高齢者のペットに対する愛着度は高く、その絆は他の年代よりも強く深い場合が多い
- 高齢者は動物を「自分の子ども」と位置づけ、唯一の話し相手・自分が面倒を見る相手・自分を頼りにしてくれる存在・温もりを与えてくれる存在と思っている
- もしペット・ロスすると、生活のリズム、社会的な活動に変化が生じ、それに伴う肉体的、精神的なダメージが大きくなる。そして過去の喪失体験（配偶者・家族など）と重なり、自分の死に対する恐れや不安感を抱く
- 現在ともに暮らしている動物が亡くなった後はもう動物は飼わないというのは、本当は飼いたいと体力的、経済的、さらに自分の余命を考えるととても最後まで責任が持てないから

等の理由を鑑みると、ペット・ロスによって失うものはあまりにも大きすぎる気がする（鷺巣 1999）。

そして、「ペットとの生活が高齢者『寝たきり』を治す」という論文の中で、人と動物との関係に詳しい、東京医科歯科大学国際環境寄生虫病学分野講師で内科医の高柳友子は、

動物も限りある命ですから、生き甲斐だったペットがお年寄りより先にいなくなる場合だってある。そうした可能性も受け入れた上で、ペットを飼うことが大切です（藤村かおり 2002: 143）

と述べている。自分もペットもいつか死ぬし、高齢者ともなれば色々な人生経験をしてきたのだから、その悲しみをどう乗り越え、受け入れるか。そこにアニマルセラピーの問題点を解決するカギがあると思われる（藤村かおり 2002）。

ペットロスの解決法として、最後に、「個々のライフスタイルが生かせなければ意味がない」という論文からも挙げる。これは、ペットは家族同様という人のための介護型有料老人ホーム「桜の園」についてとりあげているが、このホームの「きちんと別れることはペットロスから立ち直るには必要なことだ」（著者不明 1999）という心遣いにとある夫妻が感銘を受けたという話がある。この話は、今考えられる中でも一番有効なペットロスに対する解決法であろう。

その他の問題点として、山崎恵子は、「高齢者にとっては年を重ねるごとにペットが飼いにくくなっていく」（山崎 1999: 28）「健康上のリスクが加齢によって上昇すればするほど、その恩恵を人は受けにくくなるような生活を強いられるようになっていく」（山崎 1999: 29）という、いわゆる〈自分の愛するペットが死ななくとも一緒に居にくくなるような体になってしまう〉という問題もあるということを述べている。ということは、高齢者に有用と思われたアニマルセラピーは、先の例示で述べた“ペット・ロス”とともに“ペットが生きていても自分の体の都合によって別れなければならない”というリスクもまたつきまとうことになる。

あと、『『ペットの死』もまた自らの孤独に拍車をかけるさらなる要因』（山崎 1999: 29）という一文もあった。高齢者はどうあっても孤独から逃れることはできないということだろう。

以上のように、“生きている”動物のペットを飼うと、嫌でも《ペットロス》の問題は避けては通れない。高齢者がペットを飼うことに関する一番の問題はそこにあるのである。しかしそれを一気に解決する方法が最近提示されている。それが次でみる“ペット型ロボット”を使った事例である。

2.6. 高齢者とペット飼育 ——ペット型ロボットの場——

生死のある動物ではなくペット型ロボットを使った事例がある。

まず山本浩司の論文をみてみたい。

アニマルセラピーの最大の問題点とは前にも述べたようにその死によって飼い主に大きな精神的負担を与えることである。先に読んだ鷺巣の論文で、高齢者がペットを飼うのはペット・ロスによる喪失感をなくせない以上根本的な解決にならないのではないかと思っただが、それ（＝ペットの死をなくす）を解決しようと開発されたのがこの論文で紹介されているペットロボットである。

これはそもそも阪神大震災で被災地の子どもたちの精神的ケアのために風船人形を渡したところ、目を見張るほどの成果があったため、それを独居高齢者のケアのために使えると思い、生まれたものである。独居世帯の外界の情報を伝える情報端末にこれを付け加え

第2章 先行研究の整理

ることにより、端末とのふれあいと対話を促進し、ひいては外部コミュニティとの情報交流を活発にさせることで孤独感を癒す(=生き甲斐、生きることへの欲望を充足させる)ことができると考えたのがそもそものきっかけである(山本 1999)。

この論文ではペット型ロボットを一種のコンピュータとして使わせようとしているが、ここでは普通のペットと同じく高齢者がペット型ロボットに接したときにもたらされる効果をみていく。

さて、ペット型ロボットを使った事例を具体的にみるために、まず浜田利満らの研究をみてみよう。

まず、この論文で頻繁に出てくる“RAA”という語句は“ロボット介在活動”という意味である。

人間は、ロボットと共生することに関し、人生の楽しみ、喜びを個人的に享受することを期待している。

そして、ロボットの福祉・介護応用に関し否定的な評価をする属性がない。

高齢者の福祉・介護においてロボットがいろいろな分野で期待されていることを示すが、中でも共生の相手としての期待が高いことを示している。

介在者と施設員の評価結果はともに RAA の効果・印象としては相対的に高い評価値の分布を示した。

介在者と施設員とでは、痴呆のレベルに対し、評価の分布が異なる。その理由として、介在者は活動の場においてのみ被験者と交流するので、その場の短い時間における反応から評価するため、被験者の痴呆度に応じた対応が困難なため。一方、施設員は普段は反応の少ない、痴呆がある被験者のわずかな表情等の変化を察知できるからということが考えられる。

介在者の場合、飼育歴がある場合とない場合では統計的有意差があるが、施設員の場合、有意差がなかった。その理由として介在者は動物を話題にし、被験者とのコミュニケーションが進み、評価を高めたからということが考えられる。

ここからの考察として、全体としては、RAA に対する評価は介在者、施設員ともに高く、RAA の可能性は高いと判断できる。

まとめとして、ロボットと被験者との間の介在者の存在が、被験者の外部への反応において重要である。

ロボットセラピーが効果的な理由として、ロボットの動作、あるいは介在者との会話は人間の感性(=過去の動物飼育を想起したり、周囲の人と共通の話題でコミュニケーションをとったりする能力)を刺激し、人に癒しの効果を生んでいる。

現在、ロボットの動作のバリエーションが少ないため、アニマルセラピーと比べ、刺激の持続性・安定性が小さいが、それが改善されれば場を構成している介在者は同じ高齢者が務めることも可能になり、場のバリエーションが増えると考えられる。また、介在者を人間に代わりロボットが行うことも可能になるかもしれない(浜田ほか 2003)。

そして、鈴木みずえ・金森雅夫らのロボットを使つてのアクティビティケアの研究についてみていこう。

タイトルのアクティビティケアとは、直訳すると《世話活動》。こう置き換えても何ら問題はない。

いわゆるアニマルセラピーが様々な分野で注目されているが、この論文は有名なソニーのペット型ロボット『AIBO』と高齢者が遊ぶと高齢者にどのような変化が起きるかを調べたものである。

結果として、

- ペット型ロボットが日々の生活を過ごす上での刺激となっている（日常生活の活性化）
- ロボットがきっかけとなって高齢者の積極的な会話を引き出し、家族間の会話が全体的に増え、本人と家族の相互理解が促進された。結果的に社会性が刺激された

ということがわかった。

一般に、施設でのペット型ロボット導入に求められていることは、対象者の相互理解のきっかけづくりや役割機能の改善などが多い。実際に、デイルームなど他の人々もいる場所でも活動を行うとロボットを通じて他の高齢者、介護・看護職員との会話が頻回になり、他の人々との相互理解のきっかけとなるといわれている。

高齢期は配偶者の死などの体験から愛情、親密さに関する心理面が脅かされる時期でもある。特に家族と離れて暮らす高齢者には、家族とは違った愛情を注ぐ対象が身近にいることが大切といわれている。

そういう意味ではこの論文での収穫は、「ペット型ロボットは、他人との相互理解のきっかけ作りを促すもの」といえる。それにこれまでの論文で得たものを加味すると、ペットは直接的にはペット自体とのふれあいを、間接的には人とのふれあいを促すものであろう。なお、卒研のテーマとは直接関係ないが、上記の効果を引き出すためには、

- ペット型ロボットが対象者の好みに合っているか。ただ、動物などを怖がる高齢者でもペット型ロボットならば好む対象者も多い

ということを考慮することが必要である。

そして、ロボット型ペットのメリットとして、

- 細菌感染の心配がない

というものがある（鈴木ほか 2002）（金森ほか 2002）。

第2章 先行研究の整理

個別アクティビティの対象者は良好に改善を示し、個別アクティビティの介入前後では対象者は自発的な会話が多くなり、意欲的な行動や積極性が認められた。

個別アクティビティの身体的健康度の解釈度では日常役割機能（身体）が有意ではないが、改善の傾向が認められた。活力（VT）が有意に改善した。

この論文ではとりあげるべき重要なものが一つあった。それは、心身の機能の低下が著しく、ペット型ロボットに全く興味・関心を持たない高齢者に対しては、これらの効果（＝心身の機能の活性）は期待できない。対象者の選定が重要ということである。

今後は高齢者のコンパニオンロボットとして、またペットとして、高齢者とともに暮らし、危険を察し、安全を守る『番犬ロボット』の開発も期待されている（鈴木ほか 2004）。

AIBOではなく猫の形を模したロボットを使用した事例がある。中島豊四郎らの研究をみてみよう。

これまでペットロボットと言えば“AIBO”という、動物（“AIBO”では犬）の形をしているがボディはメタリックで、いかにも無機質なロボットというイメージを与えたが、この論文は本物の猫に似せて作られたペット型ロボット“ネコロ”を高齢者に使用すればどうなるかの調査結果を記述したものである。

調査結果自体は一定の成功を挙げ、「この結果は活けてある花より格段に高い」（中島ほか 2003: 100）という結果が出た。「施設に入居している利用者は、施設外へは出れないので、擬似的な動物がいれば非日常的で喜ばれる」（中島ほか 2003: 100）という感想が他にとりあげるべきところである。ただ、この論文では肝心の外見が実物によく似ている“ネコロ”と外見が機械的な感じのする“AIBO”の差は調査されていなかった。だが、“AIBO”と“ネコロ”、のどっちを使用するにしろ、高齢者に対して一定の効果のあるのは事実である（中島ほか 2003）。

以上がロボット型ペットを使った事例であるが、最後に少し変わった事例を見て、先行研究のまとめを締めくくりにする。

2.7. 高齢者とペット飼育 ——動物型玩具の場合——

ペット型ロボットだけでなく、動物型玩具を使った事例もある。

楠加銘子らの研究のコンセプトは、アルツハイマー患者にも心理的效果が示されたペットセラピーでも、重度痴呆性高齢者に対して動物を用いるのは危険を伴い、かといってペットロボットは動物のような危険はなくとも高価であるというデメリットがあるため、それに比べると玩具は安全かつあくまでも対象者やスタッフとのコミュニケーションの媒体であると考え、動物型玩具—電池で動く—を作業療法に用いればよいのではないかと考えたものである。そしてそれを調査研究した。

この調査研究では、トラ・ゴリラ・犬の玩具が用いられ、トラ・ゴリラ型玩具は（日常には実在しない動物がモデルであることから）玩具あるいは架空物として認識されることが予想され、犬型玩具は（犬は地域社会において日常的に遭遇する機会が多い動物である

ため）実在するペット，あるいはペットロボットとして痴呆性高齢者に認識されることが予想された。

調査結果は，犬型玩具に対する反応が最も多く，関心を示す行動の増加や世話すると感情を表出する発言，それを介して他者とのコミュニケーションを図っている例が多かった。トラ・ゴリラ型玩具に対しては，注視はするものの触れる行動は少なかった。

なぜ犬に対する関心が最も高かったかという点，犬型玩具自体のもつ素材が対象者にとって身近な存在であり，対象物に対する自己の行動が表現しやすいものであったためである。

トラに対する触れる行為が多かったのは，トラを猫と認識したためである。

ここからわかったことは，もののもつ素材や条件を作業療法場面に応用することで，痴呆性高齢者が過去にもつ心地よい感情を伴った行動を容易に促すことが可能である。あと，準備から後片付けまでをスタッフ一人で容易に行える利点がある。従って，この試みを実際に実行すれば成功する可能性は高いと思われる（楠ほか 2002）。

以上が先行研究のまとめである。次章からは私の行った調査研究の結果と考察を提示したい。

第3章 調査研究の結果

3.1. 研究方法

本調査で使用した調査票は、国内外の関連研究を文献検索し、その上で作成されたものである。回答割合、有効回答割合を最大限に上げるために、「はい・いいえ・わからない」の3択、1～5までの5択を中心に、記述式の設問を殆ど使わずに作成した。調査票の内容項目は、年齢、性、同居家族の有無、職業、学歴の基本属性のほかに、地域社会とのかかわりに関する項目13、青少年の教育に関する回答者の考えに関する項目12、ペットの飼育に関する項目13、60歳以上の高齢者に尋ねた、価値観や生活への満足度に関する項目19、健康状態に関する質問6、合計63である。このうち、ペットに関する項目13と60歳以上の高齢者に尋ねた、価値観や生活への満足度に関する項目19を主に本研究の分析対象とした。

対象者は、山形県中部に位置する人口約26万人の山形市在住者を母集団とし、電話帳（NTT番号情報株式会社東北支店（編）2005）より、母集団件数59,274件の中から抽出開始番号2、抽出間隔49で無作為に抽出した20歳以上の男女合計1200人である。郵送法を用いて平成16年11月に調査を実施し、11月29日から12月24日まで回収された。回収された回答のうち、今回の調査で特に重要な、高齢者にあたる60歳以上の男女の有効回答は428通（35.7%）である。

解析にはSPSSを用いた。

3.2. 質問項目

質問項目の作成にあたっては、第2章までの先行研究を参考にし、そして高齢者の幸福度を測るためにPGCモラル尺度を利用した。

なお、この調査は私の他に2人の調査研究も兼ねたものであったため、後の分析に使われた質問項目のみ記載する。質問項目の具体的な内容は以下の通りである。

<地域社会とのかかわり>

居住年数

「あなたは現在のところに住んでから何年になりますか（同一町内会程度の移動は現在のところに含みます）」

1. 1年未満
2. 1年以上5年未満

3. 5年以上10年未満
4. 10年以上20年未満
5. 20年以上
6. 生まれてからずっと

近所づきあいの程度

「あなたは、普段近所の人とどの程度のつきあいをしていますか」

1. 自分から積極的につきあいをしている
2. 誘われればつきあいをする
3. あいさつする程度
4. ほとんどつきあっていない

友人知人の数

「あなたには、普段親しくしている友人や知人がどのくらいいますか（ご近所の方も含みます。現在の職場の同僚など仕事上のつきあいだけの方は除きます）」

1. ほとんどいない
2. 3人程度まで
3. 3～5人程度
4. 5～10人程度
5. 10～20人程度
6. 20人程度

日頃の行動

「あなたの日頃の行動について、もっとも近い数字に○をつけてください（5.あてはまる 4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.あてはまらない）」

- a. 町内での盆踊りやバザーなど、イベントや催し物によく参加する
- b. 環境美化や防犯活動など、町を住みやすくする活動によく参加する
- c. 運動会や文化祭など、学校で催される行事をよく見に行く
- d. ボーリングやゲートボールなど、主に知り合いや団体などでおこなう、運動やスポーツにかかわる活動によく参加する
- e. 散歩やジョギングなど、主に個人や身内の人とおこなう運動やスポーツをよくする
- f. 習いごと教室など、主に知り合いや団体などでおこなう、趣味にかかわる活動によく参加する
- g. ガーデニングや囲碁・将棋など、主に個人や身内の人とおこなう趣味をよくする

第3章 調査研究の結果

(中略)

- j. 地域の子どもたちとふれあう機会が多い

<ペットの飼育>

ペット飼育経験

「あなたはこれまでに一度でも、継続的に犬や猫や鳥などのペットを飼ったことがありますか (1.はい 2.いいえ)」

現在飼育

「あなたは、現在ペットを飼っていますか (1.はい 2.いいえ)」

飼育数合計

「あなたはこれまでにペットを合計で何匹くらい飼いましたか (現在飼っているものも含みます)」

- 1 1～2匹
- 2 3～5匹
- 3 6～10匹
- 4 11匹以上

飼育期間

「あなたにとって今まで一番印象に残ったペットとは、散歩や遊びなどで、1日のうち平均してどのくらいの時間一緒にいましたか (いますか)」

- 1 半年未満
- 2 半年～5年
- 3 6年～10年
- 4 11年以上

ふれあい時間

「あなたにとって今まで一番印象に残ったペットとは、散歩や遊びなどで、1日のうち平均してどのくらいの時間一緒にいましたか (いますか)」

- 1 30分未満
- 2 30分～1時間
- 3 1時間～2時間
- 4 2時間以上

ペットとの関わり

「あなたとペットとのかかわりに関して、あなたの考えにもっとも近い数字に○をつけてください（5.そう思う 4.ややそう思う 3.どちらともいえない 2.あまりそう思わない 1.そう思わない）」

- a. ペットのいない生活など、想像もできない
- b. ペットは自分にとって、家族の一員のようなものである（家族の一員）
- c. ペットは自分にとって、親友もしくはパートナーのようなものである（親友パートナー）
- d. ペットを飼うようになって、家族との会話が増えた
- e. ペットを飼うようになって、他人と知り合う機会が増えた（他人と知り合う機会増加）
- f. ペットが死んだとき、それを自分の死と重ね合わせたことがある
- g. ペットが死んだとき、それを自分にとって身近な人の死と重ね合わせたことがある
- h. ペットが死んだとき、価値観や人生観が変わった

<価値観・満足度>

「次のそれぞれの質問に対して、該当する数字に○をつけてください（1. はい 2. いいえ 3.わからない）」

- a. 自分の人生は、年をとるにしたがってだんだん悪くなってゆくと感じますか
- b. あなたは現在、去年と同じくらい元気があると思っていますか
- c. さびしいと感じることがありますか
- d. ここ1年くらい、ささいなことを気にするようになったと思いますか
- e. 家族や親戚や友人との行き来に満足していますか
- f. 年をとって前より役に立たなくなったと思いますか
- g. 心配だったり、気になったりして、眠れないことがありますか
- h. 生きていてもしかたがないと思うことがありますか
- i. 若いときに比べて今のほうが幸せだと感じますか
- j. 悲しいことがたくさんあると感じますか
- k. 不安に思うことがたくさんありますか
- l. 以前より腹をたてる回数が多くなったと思いますか
- m. 生きることは、たいへんきびしいと思いますか
- n. 今の生活に満足していますか
- o. ものごとをいつも深刻にうけとめるほうですか
- p. 心配ごとがあるといつも深刻にうけとめるほうですか

第3章 調査研究の結果

「つぎのことがらについて、もっとも近い数字に○をつけてください (5.あてはまる
4.ややあてはまる 3.どちらともいえない 2.あまりあてはまらない 1.あてはま
らない)」

- a. 家族や親しい友人とよく話す
- b. 自分は信仰心を持っているほうだと思う
- c. 死ぬのは怖いと思う

<属性>

性別 (1.男性 2.女性)

年齢 ((1~4 は今回の調査の対象外・59 歳以下の選択肢) 5.60~64 歳 6.65~69 歳 7.70
~74 歳 8.75~79 歳 9.80 歳以上)

同居人 ((いくつでも○をつけてよい) 1.一人暮らし 2.夫または妻 3.子または嫁・婿 4.
孫 5.親または舅・姑 6.その他の親族 7.親族以外の方)

現在の職業 (1.会社員や公務員や商店の店員など、常勤で雇われている仕事 2.パート
や派遣など、一時的に雇われている仕事 3.商店やサービスなどの自営業主、またはその手
伝い 4.農業や林業など、またはその手伝い 5.仕事はしていない (専業主婦、学生などを
含む))

最終学歴 (1.中学校, (旧制) 尋常小学校, (旧制) 高等小学校 2.高等学校, (旧制) 中
学校 (師範学校, 実業学校, 高等女学校を含む) 3.短期大学, 大学 (大学院を含む), (旧
制) 高等学校 (専門学校を含む))

なお、この調査のあとに行った分析 (重回帰分析) では、これらの質問項目より

- ① 価値観・満足度を問う 16 の質問項目で得られた各変数を各質問ごとに変換し、ケ
ースごとに合計した “PGC モラル尺度”
- ② 同居人の項で得られた各変数の値に応じて、 $2 \times 4 = 16$ つに分類した “同居形態 16
分類” (6,7 の項目は、はいの数が少ないため無視)
- ③ ②で得られた各変数の値を、一人暮らしから 4 世代同居・その他までの 8 つに分類
した “同居形態 8 分類”. ちなみに 2 世代以上では、配偶者の有無を区別せず (各
変数の値は、1.一人暮らし 2.夫婦のみ 3.2 世代 (子) 4.2 世代 (親) 5.3 世代
(子・孫) 6.3 世代 (親・子) 7.4 世代 (親・子・孫) 8.その他)

- ④ ③で得られた各変数の値を，一人暮らしから3世代・その他までの5つに分類した“同居形態5分類”（各変数の値は，1.一人暮らし 2.夫婦のみ 3.2世代 4.3世代 5.その他）
- ⑤ ④の各変数の値を，PGC尺度平均の高い順に再割り当てした“PGC降順”．ちなみに5（その他）はデータ数が少ないため欠損値にした（各変数の値は，1.夫婦のみ 2.2世代 3.3世代 4.一人暮らし）
- ⑥ 現在の職業の項目より有職者とそれ以外を区別した“有職ダミー”（各変数の値は，0.無職，1.有職）

の，以上6個の変数を作成して，分析にかけた．

3.3. 回答データ

ここでは主な変数の分布を確認する．

まず属性だが，性別は男性が2分の3を占め（67.7%），年齢は60～64歳がやや多く，そこから80歳以上まで下り坂の分布である．同居形態16分布では8の“配偶者と2人で同居”が38.5%と突出しており，それは同居形態8分布・同居形態5分布でも2世代・3世代同居が増えてくるも変わらない．有職ダミーでは無職と有職がほぼ半々で，学歴では中学歴（高卒程度）が49.3%と約半分を占める．

次に地域社会とのかかわりだが，居住年数は20年以上が62.4%と圧倒的に多く，近所づきあいの程度は“自分から積極的に・誘われれば・あいさつ程度”の合計で97.6%，友人知人の数は“5～10人”の29.3%を中心に，友人知人のいる人の割合を合計すると97.4%と，ほとんどの人が程度の差こそあれ何らかの近所づきあいがあり，友人知人がいるということだった．日頃の行動に関しては，町を住みやすくする活動に参加している人が約半数（51.7%）を占め，ボーリングやゲートボールなどをする人はやや（あてはまらない・あまりあてはまらないで67.0%）おらず，そして地域の子どもたちとふれあう機会のない人（あまりないも含む）は61.7%とやや多かった．

そしてペットの飼育についてだが，現在飼育していない人は59.7%とやや多く，これまでの飼育数合計は1～2匹が約半数（49.6%）を占めた．飼育期間は半年以上で散らばっていて，ふれあい時間は30分～1時間でやや多いぐらい（35.2%）で突出とまではいかなかった．ペットいない生活想像不可の項目では“そう思わない”と答えた人が35.1%，“あまりそう思わない”を合わせると半数以上（54.8%）になったが，家族の一員の項目では“そう思う”と“ややそう思う”を合わせると67.3%とかなり多かった．そしてペットを通じて家族との会話増加の項目でも“そう思う”と“ややそう思う”を合わせて54.8%と半数以上を占めた．ちなみにペット死んで価値観変化の項目では“そう思わない”と“あまりそう思わない”合わせて54.4%と多めだった．

第3章 調査研究の結果

最後に価値観・満足度についてだが、生きることはきびしい（48.7%）と心配ごと深刻にうけとめるほう（47.5%）で“はい”が少し多めの他は高齢者が日々の生活で満たされていると思われる回答が多く、PGC モラール尺度も 11（最高 16）を中心にベルカーブを描いていた。

第4章 分析結果

4.1. ペット飼育による間接的効果

まず前章の変数分布の確認時に目立った結果の出た、(ペットを飼うようになって) 家族との会話増加を被説明変数とした重回帰分析を行う。説明変数として、(ペットは自分にとって) 親友パートナー、(ペットを飼うようになって) 他人と知り合う機会増加、そして前章の確認時に目立った結果の出た(ペットは自分にとって) 家族の一員を投入した(表1)。これはペットを飼育することによりどうなるかを調べたものである。

まず、全てにおいて0.1%水準で有意であった。重相関係数は $R = 0.743$ 、決定係数は $R^2 = 0.552$ で、重回帰式はあてはまりが良く、分散分析の有意確率 $= 0.000$ が有意水準 $\alpha = 0.05$ より小さいので、この仮説 H_0 は棄てられる。

表1の分析結果によると、3つの説明変数は全て有意であったが、特に他人と知り合う機会増加においては他の2要素よりも標準化偏回帰係数が高く、被説明変数である家族との会話増加にもっとも大きな影響を与えている変数であると思われる。つまり、ペットを飼って犬の散歩などで他人と知り合う機会が増加することによりそれをもとにした家族との会話が増加するということが言えた。ちなみに他人と知り合う機会増加に次いで影響を与えている変数は親友パートナー、家族の一員の順である。

表1 家族との会話増加を被説明変数とした重回帰分析

説明変数	非標準化回帰係数	標準誤差	標準化偏回帰係数
(定数)	0.849	0.179	
家族の一員	0.182***	0.054	0.188
親友パートナー	0.270***	0.057	0.295
他人と知り合う機会増加	0.363***	0.048	0.403

N = 427
自由度調整済決定係数 = 0.546

4.2. その間接的効果から導き出される結果(1)

次に、この調査のあとで作成した変数であるところのPGCモラル尺度を被説明変数とした重回帰分析を行った。説明変数として、家族や友人とよく話すを投入した(表2)。PGCモラル尺度はここでは高齢者の満足度を測るものであり、転じて高齢者の幸福感の指標

第4章 分析結果

としている。したがって、この分析により家族や友人とのコミュニケーションと高齢者の幸福度は有意な関係にあるかを調べたものである。

これも前の分析と同じく 0.1%水準で有意であった。重相関係数は $R=0.309$ 、決定係数は $R^2=0.093$ であるものの、分散分析の有意確率=0.000 が有意水準 $\alpha=0.05$ より小さいので、この仮説 H_0 は棄てられる。

表 2 の分析結果によると、家族や友人とよく話すことと高齢者の幸福感に有意な関係がみられた。

表 2 PGC モラル尺度を被説明変数とした重回帰分析(1)

説明変数	非標準化回帰係数	標準誤差	標準化偏回帰係数
(定数)	3.364	0.901	
家族や友人とよく話す	1.388***	0.208	0.309

N=427
自由度調整済決定係数=0.093

そして、同じく PGC モラル尺度を被説明変数として重回帰分析を行い、説明変数には家族や友人とよく話すに加えて友人知人の数も投入した (表 3)。ここでは家族や友人とのコミュニケーション・友人知人の数と高齢者の幸福度は有意な関係にあるかを調べた。

これも 0.1%水準で有意であった。重相関係数は $R=0.354$ 、決定係数は $R^2=0.121$ であるものの、分散分析の有意確率=0.000 が有意水準 $\alpha=0.05$ より小さいので、この仮説 H_0 は棄てられる。

表 3 の分析結果によると、家族や友人とよく話すこと・友人知人の数と高齢者の幸福感に有意な関係がみられた。

表 3 PGC モラル尺度を被説明変数とした重回帰分析(2)

説明変数	非標準化回帰係数	標準誤差	標準化偏回帰係数
(定数)	2.166	0.942	
家族や友人とよく話す	1.170***	0.215	0.260
友人知人の数	0.535***	0.144	0.177

N=427
自由度調整済決定係数=0.121

最後に、PGC モラル尺度を被説明変数として重回帰分析を行い、説明変数は友人知人の数のみ投入した (表 4)。ここでは友人知人の数と高齢者の幸福度は有意な関係にあるかを調べた。

これは0.1%水準で有意であった。重相関係数は $R=0.256$ ，決定係数は $R^2=0.063$ であるものの，分散分析の有意確率 $=0.000$ が有意水準 $\alpha=0.05$ より小さいので，この仮説 H_0 は棄てられる。

表4の分析結果によると，友人知人の数と高齢者の幸福感に有意な関係がみられた。

以上より，家族や友人とよく話すこと・友人知人の数と高齢者の幸福感に有意な関係がみられるということがわかった。

表4 PGCモラル尺度を被説明変数とした重回帰分析(3)

説明変数	非標準化回帰係数	標準誤差	標準化偏回帰係数
(定数)	6.083	0.597	
友人知人の数	0.782***	0.143	0.256

N=427
自由度調整済決定係数=0.063

4.3. その間接的効果から導き出される結果(2)

そして、友人知人の数・家族や友人とよく話すという変数と、ここでは高齢者の幸福度を表している PGC モラール尺度の関係を図的に示す平均値のプロットを提示したい。

まず、友人知人の数の度数分布表（表 5）から具体的に見ていきたい。一番多いのは友人の数が 5～10 人という人で、29.3%と多く、ほとんどいないの他の 4 項目ではだいたい同じくらいの割合である。

表 5 友人知人の数の度数分布表

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	ほとんどいない	11	2.6	2.6	2.6
	～3人	62	14.5	14.5	17.1
	3～5人	85	19.9	19.9	37.0
	5～10人	125	29.2	29.3	66.3
	10～20人	74	17.3	17.3	83.6
	20人～	70	16.4	16.4	100.0
	合計	427	99.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	1	.2		
合計		428	100.0		

これをグラフにしたのが図 1 である。一番多い友人知人の数であると答えたところの 5～10 人はグラフでは突きぬけているというほどではないが、他との違いは明らかである。

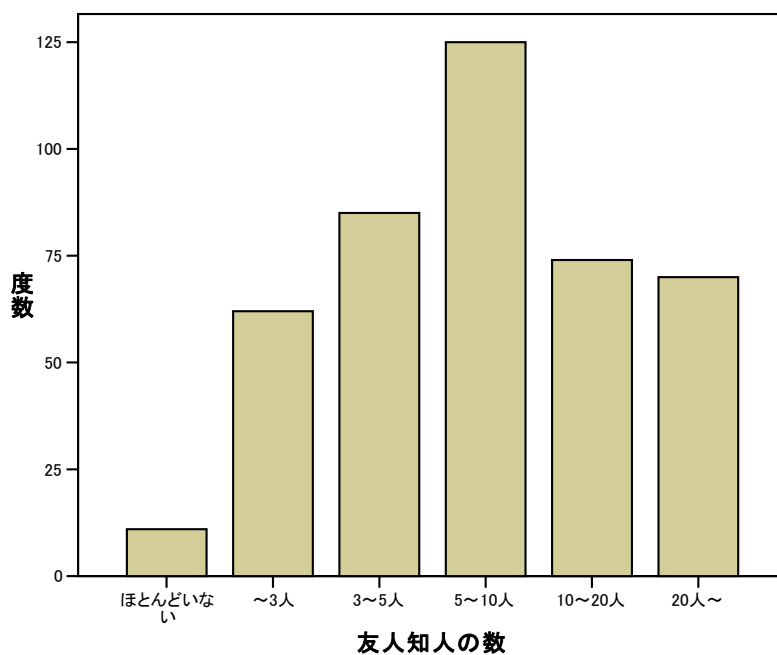


図 1 友人知人の数の棒グラフ

さて、図2は友人知人の数とPGCの平均値のプロットであるが、これを見れば明らかなように、友人の数が増えるにしたがってPGCの平均値、つまり高齢者の幸福度は増えている。

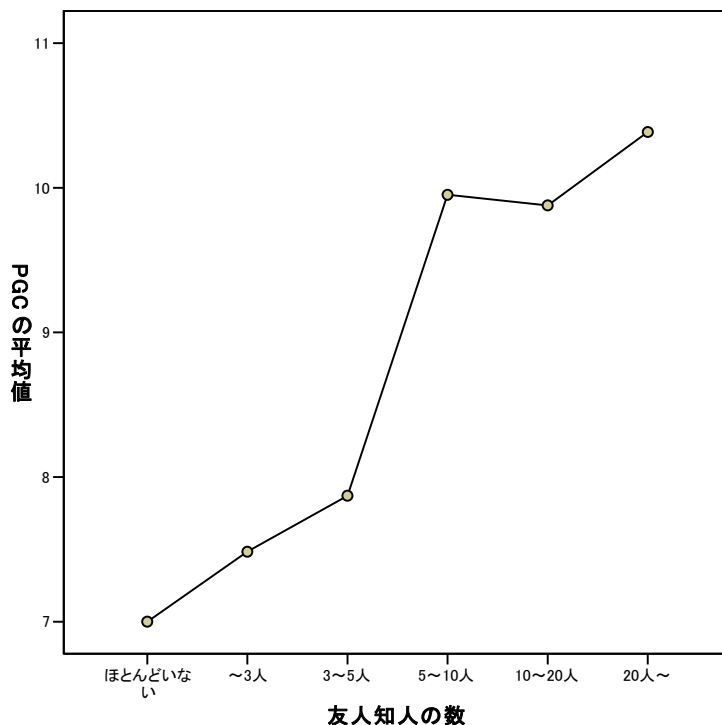


図2 友人知人の数とPGCの平均値のプロット

そして上のプロットが有意かどうかを一元配置分散分析によって確認した（表6）。その結果、グループ間の有意確率は0.000と有意であった。

表6 友人知人の数とPGCモラル尺度の一元配置分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	588.587	5	117.717	7.347	.000
グループ内	6745.263	421	16.022		
合計	7333.850	426			

第4章 分析結果

そして、家族や友人とよく話すことと PGC の平均値のプロットも分析した (図 3)。これもまた見れば明らかであるが、家族や友人とよく話すことにしたがって PGC の平均値、つまり高齢者の幸福度は増えている。

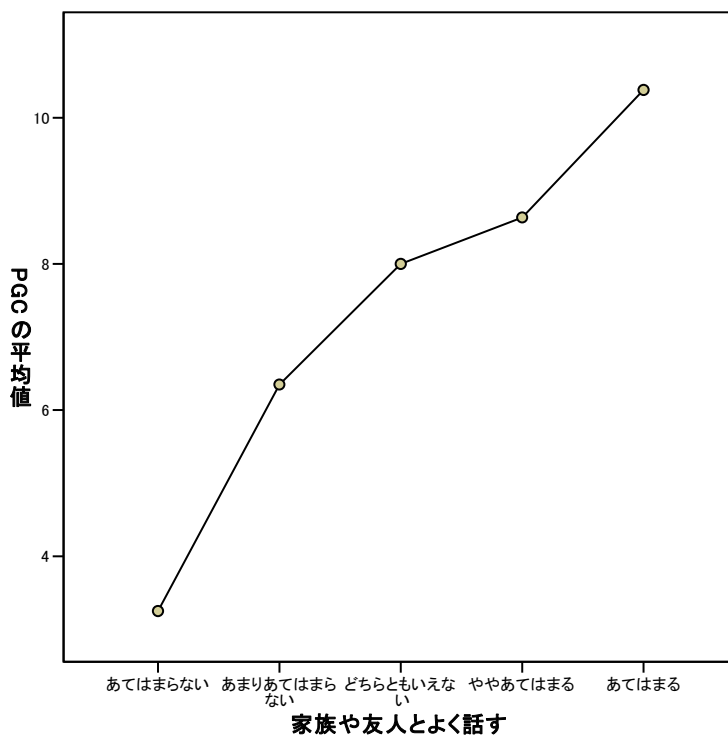


図 3 家族や友人とよく話す と PGC の平均値のプロット

そして上のプロットが有意かどうかを一元配置分散分析によって確認した (表 7)。その結果、グループ間の有意確率は 0.000 と有意であった。

表 7 家族や友人とよく話す と PGC モラール尺度の一元配置分析・分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	708.717	4	177.179	11.626	.000
グループ内	6370.039	418	15.239		
合計	7078.757	422			

この結果、友人知人の数の増加か家族や友人とよく話す機会が増えることにしたがって PGC モラール尺度の増加、つまり高齢者の幸福度が増加することが確認された。

これは、近所づきあいの程度と PGC の平均値のプロットの分析（図 4）であるが、近所づきあいの程度にしたがって PGC の平均値、つまり高齢者の幸福度は増えている。

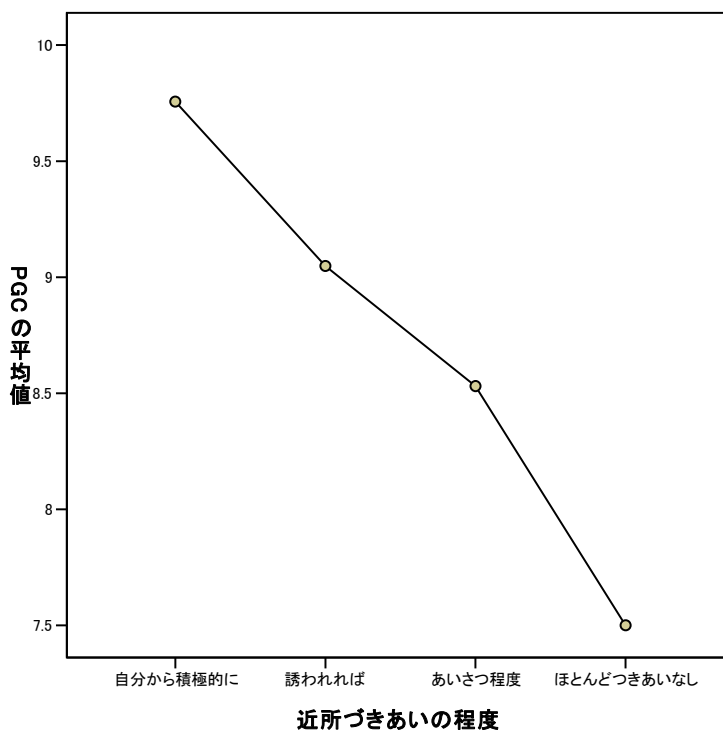


図 4 近所づきあいの程度と PGC の平均値のプロット

そして上のプロットが有意かどうかを一元配置分散分析によって確認した（表 8）。その結果、グループ間の有意確率は 0.057 と少し有意ではなかった。

表 8 近所づきあいの程度と PGC モラル尺度の一元配置分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	129.290	3	43.097	2.529	.057
グループ内	7158.047	420	17.043		
合計	7287.337	423			

第4章 分析結果

また、子どもとふれあう機会と PGC の平均値のプロットの分析（図 5）であるが、子どもとふれあう機会の多さにしたがって PGC の平均値、つまり高齢者の幸福度は増えている。

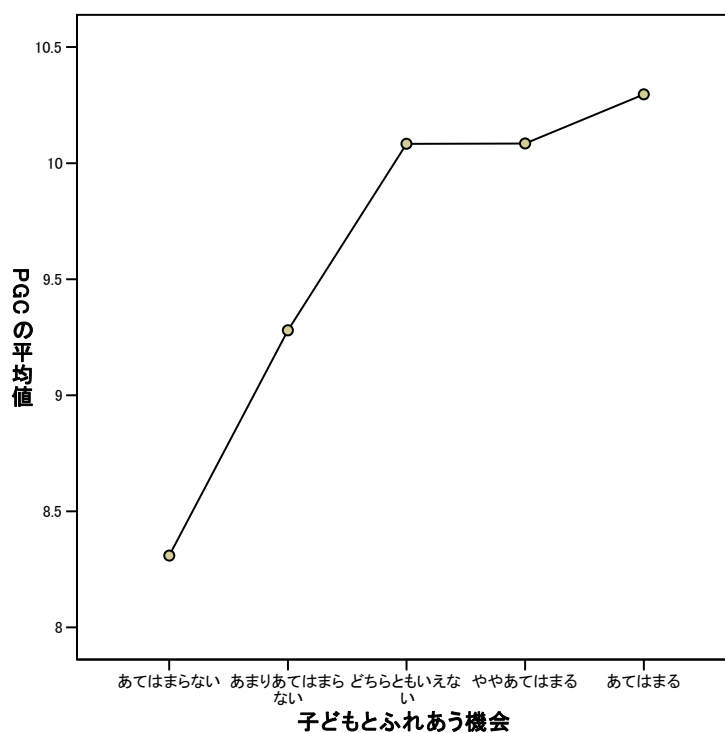


図 5 子どもとふれあう機会と PGC の平均値のプロット

そして上のプロットが有意かどうかを一元配置分散分析によって確認した（表 9）。その結果、グループ間の有意確率は 0.006 と有意であった。

表 9 子どもとふれあう機会と PGC モラル尺度の一元配置分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	240.833	4	60.208	3.685	.006
グループ内	6650.506	407	16.340		
合計	6891.340	411			

また、散歩やジョギングなどの身内スポーツと PGC の平均値のプロットの分析（図 6）であるが、身内スポーツをする機会の多さにしたがって PGC の平均値、つまり高齢者の幸福度は増えている。

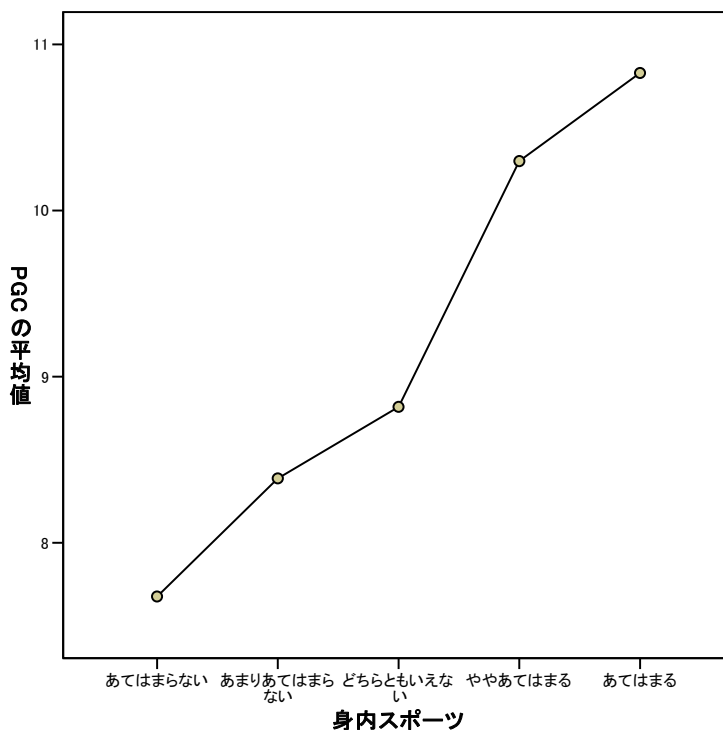


図 6 身内スポーツと PGC の平均値のプロット

そして上のプロットが有意かどうかを一元配置分散分析によって確認した（表 10）。その結果、グループ間の有意確率は 0.000 と有意であった。

表 10 身内スポーツと PGC モラル尺度の一元配置分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	638.273	4	159.568	10.491	.000
グループ内	6190.359	407	15.210		
合計	6828.631	411			

第4章 分析結果

また、町内での盆踊りやバザーなどのイベント参加と PGC の平均値のプロットの分析(図 7) であるが、イベント参加の機会の多さにしたがって PGC の平均値、つまり高齢者の幸福度は増えている。

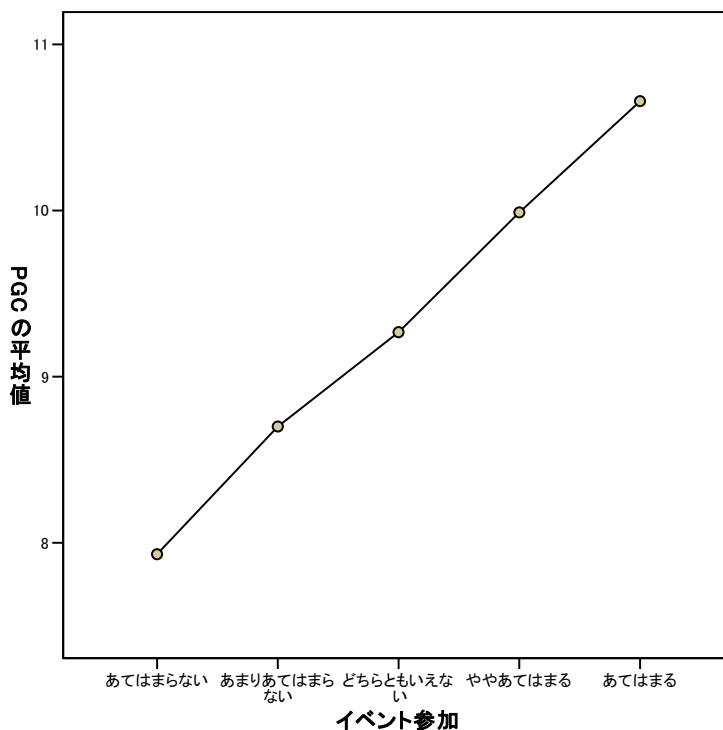


図 7 イベント参加と PGC の平均値のプロット

そして上のプロットが有意かどうかを一元配置分散分析によって確認した(表 11)。その結果、グループ間の有意確率は 0.000 と有意であった。

表 11 イベント参加と PGC モラル尺度の一元配置分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	400.167	4	100.042	6.295	.000
グループ内	6547.329	412	15.892		
合計	6947.496	416			

第5章 結論

本研究は、高齢者の孤独を癒す手段として特にペット飼育を挙げた。そして、高齢者のペットの飼育実態・高齢者の地域とのかかわり・高齢者の幸福度の3つの項目について調査し、そこから高齢者のペット飼育における効果の分析を試みた。そして、

- 1) ペットを飼い、家族の一員・親友パートナーであると飼育している本人が思うくらいにペットとの親密度が高まると、家族との会話が增える
- 2) ペットを飼うことによって他人と知り合う機会が増加すると、家族との会話が增える
- 3) 友人知人の数・人と話す機会の増加は高齢者の幸福度を高める

の3つの結果が出た。

つまり、ペットを飼うことによって、ペットそれ自体によって孤独が癒されるというよりも、ペットを飼うことによって家族や友人、近所の知り合いといった、人とのネットワークができ、そして人と会話などのコミュニケーションをとることによって高齢者の孤独が癒されるということである。つまり、ペットというのは人とのつながりを欲している高齢者にとってのコミュニケーション媒体の役割を果たしているということになる。先行研究でも、①健康効果は親密度に関わる、②ペットはコミュニケーションを円滑にする社会的潤滑油効果がある（それは“AIBO”などのペット型ロボットにおいてもいえる）、③動物好きは動物を介した社会的ネットワークを作れる、などの報告があり、今回の調査研究ではこれが実証された形となった。ちなみに、ペットそれ自体によって癒されるという話は先行研究にあったが、今回はそのような分析結果は出なかった。また、①ペットを飼うことによって健康になった、②ペットのために健康でいなければならない等の、ペットと高齢者の身体健康に関する先行研究を調査によって検証することができなかった。これは今後の課題の一つとしたい。

今後は、今回の調査ではそれを主眼としていなかったこともあって、芳しい結果の出なかった、ペット飼育には必ずついてまわるペッロスの問題について研究する必要がある。それは、ペット飼育をするならば少なからずペットに対して愛着や思い入れを抱くものの、ペットが死ぬとその反動が来てしまうという意味で重要な研究課題の1つであると言える。

文献

- 安藤孝敏, 2001, 「高齢者とペット動物」『老年社会科学』23(1): 25-30.
- ・古谷野亘・児玉好信・浅川達人, 1997, 「地域老人におけるペット所有状況とペットとの交流」『老年社会科学』19(1): 69-75.
- 青木邦男, 2001, 「在宅高齢者の孤独感とそれに関連する要因——地方都市の調査研究から」『社会福祉学』42(1): 125-36.
- 荒砂卓巳, 2004, 「少子高齢化がもたらした第3次ペットブーム——(総力特集 日本経済 人口減少ショック)-- (Part4 バラ色もある近未来社会)」『エコノミスト』82(48): 77.
- 畔上元栄, 1992, 「地域で取り組む高齢者のふれあいと健康づくり——日野市と日野社会教育センターが進めるいきいき体操の実践 (高齢社会をデザインする<特集>)」『月刊社会教育』36(13): 17-25.
- 遠藤マツエ, 1981, 「家庭生活における高齢者の孤独意識—1—70歳代女子の事例研究」『家政学雑誌』32(3): 233-40.
- , 1982, 「家庭生活における高齢者の孤独意識—2—在宅者と施設入所者の比較」『家政学雑誌』33(9): 488-97.
- , 1983, 「家庭生活における高齢者の孤独意識—3—対人接触との関連について」『徳島大学学芸紀要 教育科学』33: 75-86.
- , 1984, 「家庭生活における〔高齢者の〕孤独意識について—4—孤独意識の概念について」『徳島大学学芸紀要 教育科学』33: 87-92.
- 藤村かおり, 2002, 「ペットとの生活が高齢者「寝たきり」を治す」『週刊朝日』107(33): 141-3.
- 古川秀敏・国武和子・野口房子, 2004, 「高齢者の抑うつ・孤独感の緩和と地域社会との交流——ハワイ在住日系高齢者の調査結果」『老年社会科学』26(1): 85-91.
- 月刊福祉編集部, 1999c, 「保父さんは、おじいちゃん——子どもたちと高齢者のふれあいの場をつくる (栃木県真岡市)」『月刊福祉』82(13): 1-5.
- 浜田利満・橋本智己・赤澤とし子・松本義雄, 2003, 「ロボット・セラピーの可能性に関する一考察」『感性哲学』(3): 92-109.
- 原田寛子, 2000, 「地域の老いを支えるネットワークづくりへの提案——孤独死・自殺死の実態調査から (特集 高齢者の心の健康づくりと自殺予防活動)」『へるす出版生活教育』44(8):17-21.
- Hart, Lynette A. ・高柳友子・山崎恵子, 1996, 「高齢者とペットの関係を考える (座談会) (特集:よりよき人と動物の関係を指して)」『獣医畜産新報』49(9): 760-7.

- 橋本有理子, 2003, 「高齢女性の家族内孤立, 独居志向性とその関連要因に関する研究--家族満足度, 友人, 地域社会参加度, 孤独感との関連性も含めて」『関西福祉科学大学紀要』(7): 153-64.
- 葉山桂子, 1994, 「高齢者の孤独感に関する研究」『筑紫女学園短期大学紀要』29: 263-87.
- 金森雅夫・鈴木みずえ・田中操, 2002, 「症例報告 ペット型ロボットによる高齢者の Quality of Life 維持・向上の試み」『日本老年医学会雑誌』39(2): 214-8.
- 河地良一, 1986, 「ふるさとの未来をはぐくむ——少年と高齢者のふれあい促進事業」『青少年問題』33(9): 21-3.
- 小平広子, 1999, 「ひとり暮らし女性高齢者の健康状態と孤独感」『福島県立医科大学看護学部紀要』1: 17-22.
- 楠加銘子・伊藤朗子・米満里美・東祐二・藤元登四郎・田村俊世, 2002, 「重度痴呆性高齢者に対する動物玩具の有用性」『作業療法ジャーナル』36(3): 253-7.
- 箕浦とき子・新田静江, 2003, 「ファイル 1 研究報告 高齢者の誕生日祝いの実態——静岡県内特別養護老人ホーム調査から (実践ファイル(39))」『ふれあいケア』9(7): 48-53.
- 三宅俊治・久世淳子・谷口俊治, 1997, 「高齢者における不安について(9)——孤独感と不安 3 因子の関連について」『日本教育心理学会総会発表論文集』39: 154.
- 内閣府, 2003, 「高齢社会白書 2003 年度版」14-20,42-5.
- 中島豊四郎・福留五郎・石田勉・山根一郎, 2003, 「ペット型ロボットの高齢者介護施設の利用者における効果」『椛山女学園大学文化情報学部紀要』3: 87-101.
- 西田香津美, 1997, 「都市部における精神障害者や痴呆性高齢者のためのサロン活動——仲間づくりとふれあいの集いの場へ (特集 小地域における仲間づくりを進める——「ふれあい・いきいきサロン」活動の展開)」『月刊福祉』80(13): 30-5.
- NTT 番号情報株式会社東北支店 (編), 2005 年 5 月, 『ハローページ 山形地域版 (個人名)』東日本電信電話株式会社.
- 大羽葵, 1992, 「高齢者問題に対する市民意識の変遷」『川崎医療福祉学会誌』2(1): 113-7.
- 大川嶺子・大湾明美・呉地祥友里・小川なお子・佐久川政吉, 2004, 「「本島付随型」離島 K 島における生きがいづくりへの期待——住民主体による高齢者「ふれあい広場」への取り組みから」『沖縄県立看護大学紀要』(5): 43-50.
- 大倉喜代美, 1997, 「「高齢者とのふれあい給食」(特集 子供にとっての家庭——<実践事例>子供は「家庭」をどう学習しているか)」『教育じほう』595: 56-9.
- 齊藤具子・岡田昌史・上地勝・菊池和子・加納克己, 2001, 「資料 在宅高齢者におけるコンパニオンアニマルの飼育と手段的日常生活動作能力(Instrumental Activities of Daily Living:IADL)との関連——茨城県里美村における調査研究」『日本公衆衛生雑誌』48(1): 47-55.
- 関好博, 2000, 「生きる力を地域で育てる, 2) 高齢者とのふれあいから学ぶ” ジュニア福祉活動員”」『月刊福祉』83(8): 106-11.

文献

- 關戸啓子, 2003, 「高齢者とのふれあいに幼稚園・保育所が抱く幼児の将来への期待——全国の幼稚園・保育所へのアンケート調査結果より」『川崎医療福祉学会誌』13(1): 195-201.
- 鈴木みずえ・金森雅夫・田中操・大城一, 2004, 「症例報告 ペット型ロボットを用いた個別アクティビティにおける高齢者の精神的変化」『老年精神医学雑誌』15(1): 68-75.
- ・金榮享子・田中操・金森雅夫, 2002, 「特別寄稿 ペット型ロボットを用いた高齢者のアクティビティの試み——QOLの維持・向上を目指した新しい取り組み」『地域ケアリング』4(4): 88-91.
- 竹内幸男, 1999, 「幼児の思いやり行動に関する一研究——高齢者との触れ合いに視点をあてて」『上越教育大学幼児教育研究』13: 38-42.
- 宇都宮博, 1999, 「高齢期の配偶者との関係性ステータスと孤独感——モラルとの関連性」『日本家政学会誌』50(1): 5-10.
- 鷺巣月美, 1999, 「高齢者の不安とペット飼育／高齢者とペット・ロス——その悲しみと私たちにできること（特集／シルバー世代と動物——高齢化社会における動物の存在）」『Relatio』1(4): 36-7.
- 山縣文治, 1987, 「一人暮らし老人の孤独感について——D市における一人暮らしの高齢者調査から」『大阪市立大学生活科学部紀要』35: 355-64.
- 山口千津子, 1999, 「高齢者の不安とペット飼育——ペット飼育の問題点と今後の課題（特集／シルバー世代と動物——高齢化社会における動物の存在）」『Relatio』1(4): 34-5.
- 山本浩司, 1999, 「<時の話題>ペットロボットは孤独を癒せるか——高齢者用コミュニケーション支援器具「タマ」の開発（ペットロボット）」『三田評論』1017: 40-1.
- 山村久, 2003, 「高齢者の快適な住まい「ふれあい型」グループホーム——（新時代の創造(2)住——誰もが快適に）」『家庭科』52(581): 11-4.
- 山崎恵子, 1999, 「高齢者の不安とペット飼育——欧米におけるペット飼育高齢者へのバックアップ体制（特集／シルバー世代と動物——高齢化社会における動物の存在）」『Relatio』1(4): 28-9.
- 米沢弘恵・石津みゆ子・佐藤美紀・須賀京子・森田チエコ, 1999, 「在宅高齢者の孤独感と活動状況との関係——性による比較から」『愛知県立看護大学紀要』5: 1-9.
- (著者不明), 1999a, 「個々のライフスタイルが生かせなければ意味がない——<有料老人ホーム>社会福祉法人新生会 有料アニマルコンパニオンホーム 桜の園（群馬県群馬郡）——特集／シルバー世代と動物——高齢化社会における動物の存在——高齢者福祉・医療と動物／高齢者施設における動物の存在～動物介入の現状と今後の課題」『Relatio』1(4): 44-5.
- (著者不明), 1999b, 「高齢者の健康生活とペット飼育——生涯現役で元気に年をとるために——特集／シルバー世代と動物——高齢化社会における動物の存在」『Relatio』1(4): 20-2.